

古屋
敷遺跡

古屋敷遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第56集

2004年

2004年

日田市教育委員会

日田市教育委員会



古屋敷遺跡遠景（北から）

序 文

古来より九州の交通の要所であった本市には、多くの文化財が各所に残されています。

この中でも、市西部の大肥川一帯に広がる谷地では、平成9年度より開始された大規模な農業基盤整備事業に伴って、北部九州への玄関口として数多くの遺跡が分布することが近年明らかになりつつあります。そして、この工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、当委員会では事前に発掘調査による記録保存を実施してまいりました。

本書は、そのなかでも平成15年度に県営圃場整備事業大明地区古屋敷工区に伴って発掘調査を行った、古屋敷遺跡の調査内容をまとめたものです。

遺跡の調査では、縄文時代前期の生活の痕跡や中世の建物群や溝跡などが発見され、なかでも縄文時代の包含層から出土した土器などは市内でも数少ない縄文時代前期の資料として注目されます。

本書が、市民の方々の埋蔵文化財に対するご理解と保護につながり、地域の歴史の解明や学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力いただきました関係者の方々に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

平成16年12月17日

日田市教育委員会

教育長 謙山 康雄

例　　言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成15年度に実施した古屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は県営圃場整備事業大明地区に伴い、大分県日田地方振興局の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては大分県日田地方振興局耕地課、日田市経済部農政課、大明地区圃場整備組合組合長 森山有男氏の協力を得た。
4. 調査現場での写真撮影・実測は渡邊が行い、一部実測を雅企画有限会社の委託により実施した。
5. 本書に掲載した遺物実測は渡邊が行い、製図は一部雅企画有限会社によるものを使用した。また、藤野美音の多大な協力を得た。
6. 空中写真撮影は有限会社スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。
7. 遺物の写真撮影は長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。
8. 本書に使用した図面中の方位は、全体図が国土座標を使用し、個別遺構は磁北で表示している。なお、国土座標の数値は「測地成果2000」（世界測地系に基づいた日本の測地系）以前の旧日本測地系に基づいた数値にて表示している。
9. 写真図版に付している数字番号は挿図番号に対応する。
10. 出土遺物および図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆編集は渡邊が担当した。



日田市の位置

目 次

Iはじめに	1
(1) 県営圃場整備事業大明地区に伴う発掘調査概要	1
(2) 調査に至る経過	3
(3) 調査経過と調査組織	5
II 遺跡の立地と環境	
(1) 遺跡の位置と地理的環境	8
(2) 歴史的環境	8
III 調査の内容	
(1) 調査の概要	11
(2) A区の調査	11
(3) B区の調査	15
1. 掘立柱建物	15
2. 溝	15
3. 土坑	19
4. 柱穴	22
5. その他の遺物	22
6. 繩文土器包含層	23
7. 石器	29
(4) C区の調査	33
1. 掘立柱建物	33
2. 溝	37
3. 用水路	41
4. 土坑	41
5. その他の遺物	44
6. 石器	44
IVまとめ	
(1) 遺構の時期と変遷	46
1. 繩文時代	
2. 中世	
(2) 遺構の性格について	48
1. 繩文時代	
2. 中世	

挿 図 目 次

第1図 園場整備事業区域と調査区位置図 (1/25,000)	2
第2図 古屋敷工区試掘・調査区調査位置図 (1/6,000)	4
第3図 遺跡分布図 (1/30,000)	9
第4図 A区遺構配置図 (1/300)	11
第5図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)	12
第6図 A区出土遺物実測図 (1/3)	12
第7図 B区遺構配置図 (1/300)	13-14
第8図 基本土層図① (1/40)	13-14
第9図 基本土層図② (1/40)	13-14
第10図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)	16
第11図 1号溝実測図 (1/20、1/40)	17
第12図 2号溝実測図 (1/40、1/80)	18
第13図 1、2、3、4号土坑実測図 (1/40)	19
第14図 5、6号土坑実測図 (1/40)	20
第15図 B区遺構出土遺物実測図 (1/3)	21
第16図 縄文時代包含層グリット割図 (1/500)	23
第17図 A4～C6グリット実測図 (1/60)	24
第18図 D3～F3グリット実測図 (1/60)	25
第19図 包含層出土土器実測図① (1/3)	26
第20図 包含層出土土器実測図② (1/3)	28
第21図 包含層出土土器実測図③ (1/3)	29
第22図 B区出土石器実測図 (2/3、1/2)	30
第23図 C区遺構配置図 (1/300)	31-32
第24図 基本土層図 (1/40)	31-32
第25図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)	34
第26図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)	35
第27図 3号掘立柱建物実測図 (1/60)	36
第28図 4号掘立柱建物実測図 (1/60)	37
第29図 1、2号溝実測図 (1/80、1/600)	38
第30図 1、2号溝土層断面実測図 (1/40)	39
第31図 1号用水路実測図 (1/40)	40
第32図 1、2、3、4号土坑実測図 (1/40)	42
第33図 5、6、7号土坑実測図 (1/40)	43
第34図 C区出土土器実測図 (1/3)	45
第35図 C区出土石器実測図 (2/3)	45
第36図 日田市内の縄文時代遺跡分布図 (1/70,000)	51

挿入写真目次

写真1 大明地区空中写真	2	写真8 作業風景①	6
写真2 試掘調査風景①	3	写真9 作業風景②	6
写真3 試掘調査風景②	3	写真10 基本土層①	13-14
写真4 5トレンチ	4	写真11 基本土層②	13-14
写真5 13トレンチ	4	写真12 B区試掘調査	22
写真6 調査前風景	6	写真13 土器出土状況	22
写真7 機械作業風景	6	写真14 基本土層	31-32

写真図版目次

卷頭図版 古屋敷遺跡遠景		図版10 上段 B-5グリット遺物出土状況③	
図版1 上段 A区全景(南から)		中段 B-5グリット遺物出土状況④	
中断 A区南側完掘状況		下段 B-5グリット遺物出土状況⑤	
下段 1号掘立柱建物(東から)		図版11 上段 E-2、3グリット完掘	
図版2 上段 古屋敷遺跡周辺全景(真上から)		中段 E-2、3グリット土層	
下段 B区全景(真上から)		下段 E-2、3グリット遺物出土状況①	
図版3 上段 B区北側完掘状況(南から)		図版12 上段 E-2、3グリット遺物出土状況②	
中段 B区南側完掘状況(北から)		中段 E-2、3グリット遺物出土状況③	
下段 1号掘立柱建物(真上から)		下段 E-2、3グリット遺物出土状況④	
図版4 上段 1号溝完掘(北から)		図版13 上段 C区全景(北から)	
中段 1号溝土層		下段 C区全景(真上から)	
下段 1号遺物出土状況		図版14 上段 1号掘立柱建物(西から)	
図版5 上段 2号溝完掘(北から)		中段 2号掘立柱建物(南から)	
下段 2号溝土層		下段 3号掘立柱建物(東から)	
図版6 上段 2号溝遺物出土状況①		図版15 上段 4号掘立柱建物(西から)	
中段 2号溝遺物出土状況②		中段 1号溝南側完掘(南から)	
下段 1号土坑(北から)		下段 1号溝T字状部分完掘(東から)	
図版7 上段 2号土坑(南から)		図版16 上段 1号溝T字状部分完掘(西から)	
中段 3号土坑(南から)		中段 1、2号溝交差部分完掘(南から)	
下段 4号土坑(南から)		下段 1、2号溝北側交差部分(北から)	
図版8 上段 5号土坑(東から)		図版17 上段 2号溝南側道路部分トレンチ	
中段 6号土坑(東から)		中段 2号溝南側完掘(南から)	
下段 B-5グリット完掘		下段 2号溝北側完掘(北から)	
図版9 上段 B-5グリット土層			
中段 B-5グリット遺物出土状況①			
下段 B-5グリット遺物出土状況②			

図版18	① 1号溝A-A' 土層	図版21	上段 3号土坑（北東から）
	② 2号溝B-B' 土層		中段 4号土坑（東から）
	③ 2号溝C-C' 土層		下段 5号土坑（南から）
	④ 1号溝D-D' 土層	図版22	上段 6号土坑（北から）
	⑤ 1号溝E-E' 土層		中段 7号土坑（北から）
	⑥ 2号溝F-F' 土層		下段 7号土坑遺物出土状況
	⑦ 2号溝G-G' 土層	図版23	出土遺物写真①
	⑧ 1号溝H-H' 土層	図版24	出土遺物写真②
図版19	上段 1号用水路完掘（東から）	図版25	出土遺物写真③
	中段 1号用水路完掘（北東から）	図版26	出土遺物写真④
	下段 1号用水路T字状部分（東から）	図版27	出土遺物写真⑤
図版20	上段 1号用水路拡張部土層	図版28	出土遺物写真⑥
	中段 1号土坑（西から）		発掘調査に参加された方々
	下段 2号土坑（西から）		

表 目 次

表1 県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧	1
表2 日田市内の縄文時代遺跡一覧表	50
表3 土器観察表①	53
表4 土器観察表②	54
表5 石器観察表	54

I はじめに

今回調査対象となった日田市大字夜明字古屋敷一帯は、平成5年度刊行の大分県遺跡地図では「寺田遺跡」の名称で周知されてきた。しかし、今回調査を実施するにあたり、「寺田」の地名がこの周辺には所在せず、名称に馴染みがないとの声が地元よりあがった事から、範囲は変更せず、この一帯の周知遺跡名を小字名から、「古屋敷遺跡」と変更することとした。なお、その手続きは平成15年10月20日付けで大分県教育委員会に提出した発掘調査終了報告において周知遺跡名変更として届けている。

(1) 県営圃場整備事業大明地区に伴う発掘調査概要（第1図）

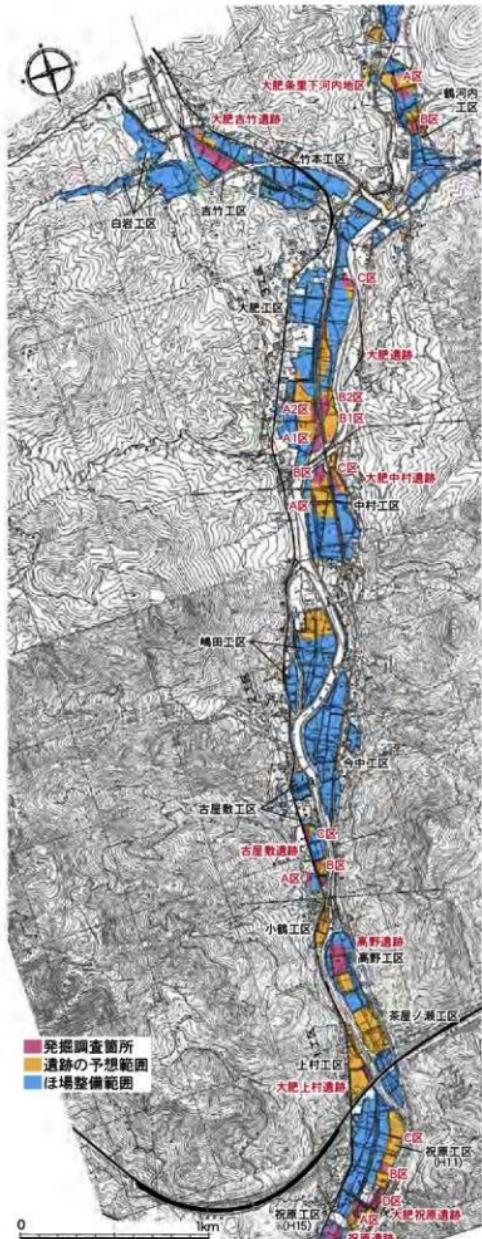
県営圃場整備事業大明地区は、日田市西部に位置する谷地である大明地区一帯の105ha（最終対象面積94.2ha）を対象として基盤整備を実施すると同時に、共同営農や農産物加工所の建設、農芸工作物生産団地の実施なども含めたモデル営農団地を創設すること目的に平成9年度より事業が実施された。これを受けた平成9年4月15日には大分県教育委員会による「農業基盤整備事業にかかる埋蔵文化財の分布調査結果について」の通知文書が出され、この一帯が文化財の調査を要する地区として判定され、平成9年4月28日には大明地区全体の工事対象箇所に関する埋蔵文化財の所在についての照会文が提出され、これを受けた事業主体者である大分県日田地方振興局と市教育委員会の両者による埋蔵文化財の取り扱いの協議を実施することとなった。

さて、これらの協議の結果、対象地域が周知の遺跡（大肥条里遺跡）に含まれること、基盤整備工事は全部で14工区（大まかには3工区）に分かれ年度ごとに工区毎の工事を実施する計画であることなどから、各工区毎に事前の試掘調査を実施することとなった。

第1表 県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧

調査年度	工区名	遺跡内容	時代	羽類	遺跡名	発掘調査年度	調査期間	調査面積(㎡)	備考
平成9年度	朝日工区	柱穴・包含層	古代・中世	盛土保存	-	97.10.23～97.10.24	-	-	試掘調査のみ
平成9年度	今中工区	なし	-	許可	-	-	97.10.20～97.10.22	-	*
平成9年度	中村工区	住居跡、石棺墓、小見用櫛組	弥生時代～中・近世	発掘調査	大肥中村遺跡	平成10年度	98.07.07～98.12.30	10,000	A～C区、重要付、試掘調査期間(98.01.26～98.12.20)
平成10年度	祝原工区	溝・土坑・柱穴	説文時代～奈良時代	発掘調査	大肥祝原遺跡	平成11年度	99.05.16～00.01.17	5,100	A～D区、A～C区報告書(99.01.24～99.01.30)
平成10年度	上村工区	壁穴・溝・土坑・柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	大肥上村遺跡	平成11年度	99.09.28～99.10.29	950	報告書、試掘調査期間(99.01.13～99.01.28)
平成10年度	東山・上郷工区	窓穴・溝・土坑・柱穴	中世	盛土保存	-	-	99.01.13～99.01.28	-	試掘調査のみ
平成10年度	小野工区	壁穴住居跡、溝・柱穴	弥生土器	盛土保存	-	-	99.01.13～99.01.28	-	*
平成11年度	鰐河内工区	柱穴・土坑・包含層	説文時代～中世	発掘調査	大肥条里遺跡下内地地区	平成12年度	00.12.04～01.02.28	5,950	試掘調査期間(09.01.26～99.01.21)
平成11年度	吉竹工区	壁穴住居跡、溝・土坑・柱穴	古墳時代～中世	発掘調査	大肥吉竹遺跡	平成12～13年度	01.01.29～01.05.24	8,270	報告書、試掘調査期間(99.03.24～99.03.31)
平成13年度	大肥工区	壁穴住居跡、溝路、甕棺墓、石格	弥生時代～古墳時代	発掘調査	大肥遺跡	平成14年度	02.05.27～03.02.13	8,200	A'区調査、試掘調査期間(02.05.13～02.05.26)
平成13年度	竹本工区	なし	-	許可	-	-	02.02.12～03.03.04	-	試掘調査のみ
平成14年度	高野工区	壁穴住居跡、溝・土坑・柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	高野遺跡	平成14～平成15年度	03.01.16～03.10.20	9,000	試掘調査期間(02.11.18～99.11.18)
平成14年度	古屋敷工区	溝・土坑・柱穴	説文時代～中世	発掘調査	古屋敷遺跡	平成15年度	03.05.19～03.10.19	7,100	試掘調査期間(02.11.31～02.12.20)
平成14年度	祝原工区	溝・土坑・柱穴	中・近世	発掘調査	祝原遺跡	平成15年度	03.05.19～03.08.04	4,500	試掘調査期間(02.21.16～02.21.20)
平成14年度	白岩工区	なし	-	許可	-	-	02.11.20	-	試掘調査のみ

*網掛けは発掘調査実施遺跡



第1図 園場整備事業区域と調査区位置図 (1/25,000)



写真1 大明地区空中写真

試掘調査は平成9年10月から平成14年11月までの各年度に実施され、そのうち遺跡の存在が明らかとなつた箇所については、再度、各遺跡の取り扱いについて協議を行つた。工法の変更等を検討したもの、遺跡の現状保存が困難である対象箇所に関しては、次年度に記録保存のための発掘調査を実施することとなつた。

平成10年度には大肥中村遺跡、平成11年度には大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡、平成12年度には大肥条里遺跡下河内地区、平成12～13年度には大肥吉竹遺跡、平成14年度には大肥遺跡、平成14～15年度には高野遺跡、平成15年度には古屋敷遺跡、祝原遺跡の計9箇所の発掘調査を実施した。

なお各工区の調査内容については表1のとおりである。

〔参考文献〕

- 行時志郎編 「大肥中村遺跡一発掘調査概報」 日田市教育委員会 2003
若杉竜太編 「大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡」 日田市埋蔵文化財調査報告書第45集 日田市教育委員会 2003
渡邊隆行編 「大肥吉竹遺跡」 日田市埋蔵文化財調査報告書第48集 日田市教育委員会 2004
渡邊隆行編 「大肥遺跡I～A・1区の調査の記録」 日田市埋蔵文化財調査報告書第50集 日田市教育委員会 2004

(2) 調査に至る経過

前述のように、県営圃場整備事業大明地区の工事が推進されるなかで、平成14年9月30日には高野(4ha)、古屋敷(3ha)、祝原(1ha)、白岩工区(5ha)の試掘調査依頼が提出された。これらの工区は平成9年度より実施されてきた大明地区の圃場整備事業の工事最終事業であり、平成15年度に工事を完了させる予定であった。これらの工区はそれぞれ飛び地状に離れて分布しており、また工事対象面積も合計13haと広く、早急に埋蔵文化財の有無の判断が必要であることから、市教委では事前の遺跡の所在の有無の確認調査を実施することとなつた。

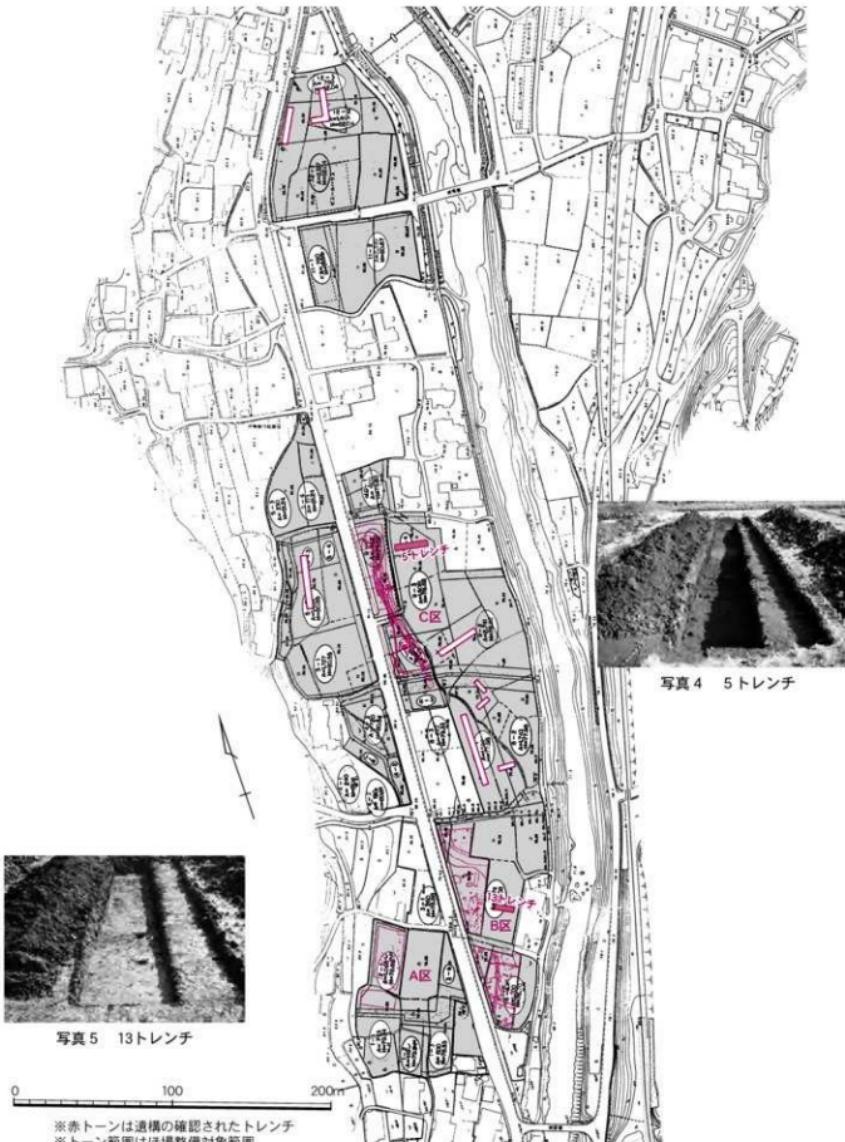
平成14年11月18日～11月28日までの期間試掘調査を実施し、全工区合わせて計33本のトレチを設定し調査を行つた結果、白岩工区を除く全ての工区で遺構の存在する箇所が明らかとなつた。(遺構の内容については表1を参照) この結果を受け、遺構の確認された箇所について、大分県日田地方振興局耕地課(以下、県耕地課)との間で、遺跡の取り扱いについて協議を実施することとなつた。この内、掘削が遺構面まで達せず、掘削面が遺構面を保護するのに十分な深さを保つと見込まれる箇所、および盛土保存される箇所については工事を許可することとし、残りの掘削が遺構面に達する箇所について検討することとなつた。



写真2 試掘調査風景①



写真3 試掘調査風景②



第2図 古屋敷工区試掘・調査区位置図 (1/6,000)

協議を進めるなかで、平成15年度内に工事完了を予定し、同時期に高野工区、古屋敷工区、祝原工区の3箇所が調査対象となる場合、調整が困難と判断されたため、極力工法の変更を行い調査対象面積を減少することとなった。また、調査期間の調整を図るため、対象工区3箇所のうち1箇所を平成14年度から先行調査することとし、この検討の結果、高野工区を平成14年度冬より調査することとなり、古屋敷工区、祝原工区は平成15年度よりの調査とすることとなった。

その後、平成15年4月には古屋敷工区の設計変更が確定し、県耕地課と遺跡の現状保存について協議を重ねた。当初、試掘調査により遺跡の存在が明らかとなつた範囲（図2）の大部分が掘削対象となっていたが、設計変更の結果、盛土による遺跡の現状保存が可能な箇所が若干増加した。しかし、残り約7,100m²ほどが工事により掘削されるとのことで、現状での保存が不可能なことから、この範囲を対象として記録保存の発掘調査を実施することとなった。

平成15年5月6日には埋蔵文化財発掘の通知を大分県教育長宛に提出して調査準備を行い、平成15年5月1日付けで市と大分県日田地方振興局との間で委託契約を結び、同9日より発掘調査を開始した。なお、対象地区は大きく3地点にわかれることから、各地点をA区～C区の3地点にわけることとなり、調査は期間をおきながら実施し、10月中旬には調査を完了した。

契約期間は平成15年度が平成15年5月1日から平成16年2月27日までの期間実施し、平成16年度は整理作業と報告書作成を実施し、平成16年4月5日から平成16年12月17日の期間委託契約を取り交わした。

(3) 調査経過と調査組織

古屋敷遺跡の調査経過については、調査日誌に基づき略述する。なお、各区ごとの調査期間は以下のとおりである。

A区：9月4日～9月8日 B区：5月9日～7月2日 C区：8月6日～10月17日

5月9日／B区の耕作土除去作業を機械で開始する。

5月19日／機械による表土除去作業を開始する。

5月23日／作業員を導入し遺構検出を開始する。

5月29日／本格的に遺構の掘り下げを開始する。

6月13日／上面の遺構の掘り下げが完了する。

6月16日／下層に縄文時代の包含層が確認される。

6月17日／調査グリットを設定し、包含層の掘り下げを開始する。

この間、梅雨時期に入り、雨天での作業となり、作業の進展に影響が大きかった。

6月27日／縄文包含層の掘り下げが完了し、実測作業を実施する。

6月30日／清掃を行い、空中写真撮影を実施する。

7月2日／すべての作業を完了し、機材の撤収を行い、B区の調査を終了した。

8月6日／C区の表土除去作業を開始する。

8月11日／本格的に作業員を動員し、遺構検出を開始する。

8月21日／道路部分の立会いを行い、遺構検出と測量作業を行い、埋め戻す。

8月22日／本格的に遺構の掘り下げを開始する。

9月4日／C区の調査を一旦止めて、A区の表土除去作業を開始し、遺構検出を実施する。

9月5日／A区の掘り下げを実施する。

9月8日／A区の遺構掘り下げ、測量作業を全て完了し、調査を終了する。

9月9日／C区の調査を再び開始する。

この間台風対策などに追われ思うように作業が進展しない。

9月30日／C区北半分の遺構がほぼ掘り下がり、南半分の遺構掘り下げに取り掛かる。

10月13日／ほぼ全ての遺構の掘り下げが完了し、写真撮影と実測作業を実施する。

10月14日／機材の撤収を実施する。

10月15日／近世の水路跡が調査区端の一部に確認され、一部拡張と確認作業を実施する。

10月17日／確認作業を終了し、古屋敷遺跡の調査を終了する。

調査終了後の10月20日には日田警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出し、10月27日には埋蔵物の文化財認定を受けた。整理作業はB区の遺物を平成15年7月7日～11月27日の間、A、C区の遺物を平成16年度4月5日～5月31日の間実施した。



写真6 調査前風景



写真7 機械作業風景



写真8 作業風景①



写真9 作業風景②

なお、調査関係者は以下のとおりである。(職名は当時のままとしている。)

平成15年度（発掘調査）

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 後藤元晴（日田市教育委員会教育長）（～平成15年7月）
諫山康雄（日田市教育委員会教育長）（平成15年8月～）
調査統括 後藤 清（同文化課課長）
調査事務 佐藤 晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長） 園田恭一郎（同文化課主査）
酒井 忠（同文化課主事補）
調査員 土居和幸（同文化課主査） 行時桂子（同文化課主任）
若杉竜太（同文化課主事）
調査担当 渡邊隆行（同文化課主事）
来訪者 下村 智（別府大学助教授） 岸本圭（福岡県教育委員会）
岩下新一（宝珠山村教育委員会）

発掘調査員 一ノ宮真彦、石井アヤ子、石井猪之助、伊藤智恵子、石井 勝、諫元正隆
江藤勝義、岡部寿美恵、小野裕昭、梶原隆介、河津定雄、北向チヅ子、小下 一
田中伝江、太郎良 開、高村三郎、中島カズ子、原 和義、原 新一、原田寅夫
原田 強、三俣エイ子、森山幸男、森山夏男、森山春義、森山八重子、森山スミ子
吉田勝秋、吉長利夫
整理作業員 石松裕美、佐藤みちこ

平成16年度（報告書作成）

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 講山康雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括 後藤 清（同文化課課長）
調査事務 高倉隆人（同文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長） 伊藤京子（同文化課副主幹）
調査員 土居和幸（同文化課主査） 行時桂子（同文化課主任）
若杉竜太（同文化課主任） 中村邦弘（同文化課主事補）
報告書担当 渡邊隆行（同文化課主事）

整理作業員 鍛冶谷節子、川原君子、坂口豊子、型川暢子、平川優子

II 遺跡の立地と環境

(1) 遺跡の位置と地理的環境（第3図）

古屋敷遺跡は日田市大字夜明字古屋敷に所在し、現在では夜明上町に該当する。

日田盆地の西に位置する大鶴・夜明の谷地を南北に流れる大肥川は福岡県小石原村皿山に源を発し、日田市最北端に位置する岳滅鬼山に源を発する鶴河内川と谷の北部で合流した後、三隈川へと流れ込んでいる。こうした河川の浸食作用によって形成された地形面は、千田 昇氏の分類によれば「中位段丘2面」と呼ばれ、その説明では「中位段丘2面」は阿蘇4火砕流堆積面がさらに開析された時の地形面のこととされる。大肥川沿には河岸段丘や高位扇状地として主要な地形面を構成している。

こうして南北に細長く発達した河岸段丘が谷を形成し、谷北部でやや広範な高位扇状地を形成した地形は、南に下るにつれその幅を狭め、夜明字小鶴付近で一旦収束し、南に下りながらやや広がった段丘面を形成しつつ三隈川へと流れ込んでいる。古屋敷遺跡はこの谷が一旦収束する付近に位置し、標高は約80mの矮小な河岸段丘上に位置する。

〔参考文献〕

中島 国夫 「日田盆地のなりたち」『日田市30年史』日田市 1974年

千田 昇 「日田・玖珠地域の地形—とくに台地地形について—」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』

大分大学教育学部 1992年

行時 志郎 「2 遺跡の立地と環境」『大肥中村遺跡—発掘調査概報—』 2003年

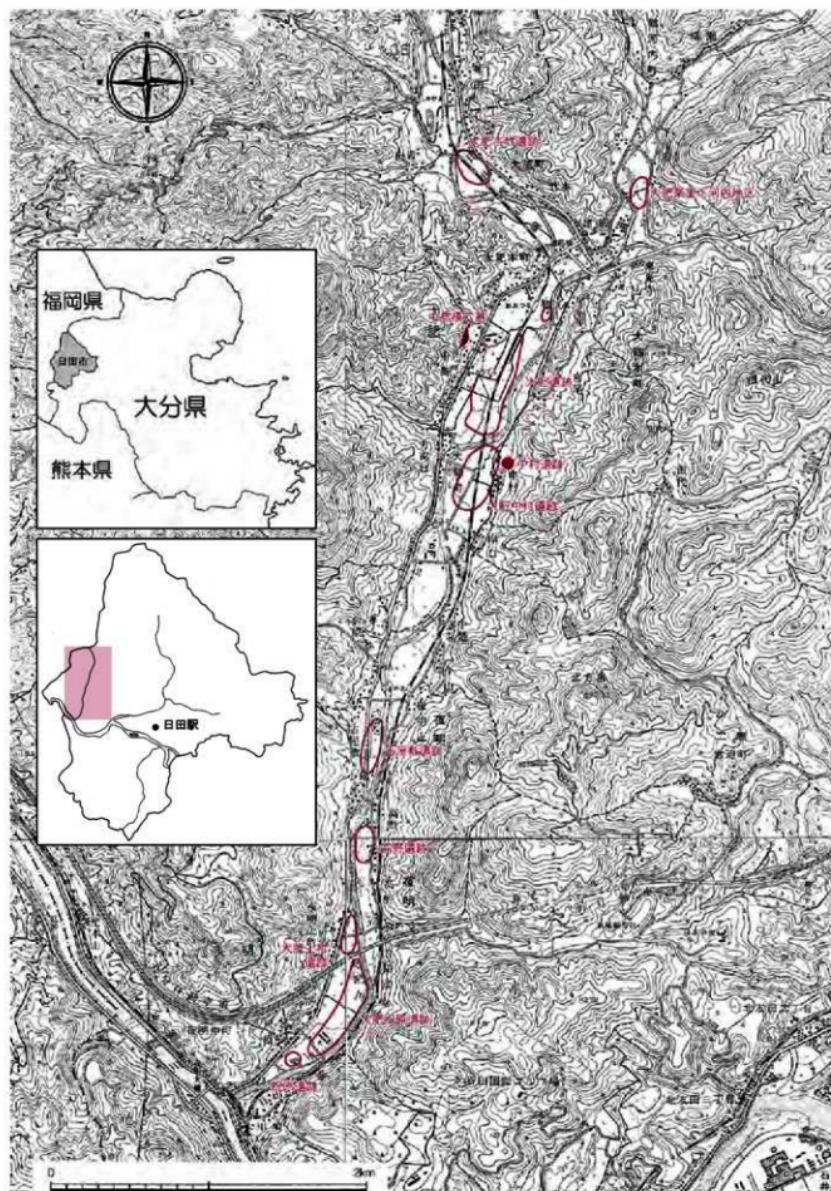
(2) 歴史的環境

この地域は近年の圃場整備に伴う調査によりその概要が明らかになりつつある。この地域で確認される生活の痕跡は縄文時代からである。大肥条里下河内地区^(注1)では前期の集石炉などが調査されている。大肥吉竹遺跡^(注2)では中期の船元式土器や抉狀耳飾などが出土し、大肥祝原遺跡D区^(注3)では後期～晩期の大量の土器を含む包含層や集石、土坑などが発見されている。

弥生時代では拠点集落が幾つか確認されている。大肥遺跡A-2、B区^(注4)、C区では、前期末から後期の集落跡、成人用甕棺墓、小児用甕棺墓などの墳墓群とそれらを囲むように流れ環濠の役割を果たしていた旧河道などが発見されている。この旧河道からは三叉鍬や杓子、建築部材など大量の木製品が発見されており、特に漆塗りの木甲の存在は注目される。大肥中村遺跡^(注5)では、中期から後期の墳墓群が発見され、高野遺跡^(注6)では中期から後期の拠点集落が確認されている。また、大肥祝原遺跡A～C区、大肥上村遺跡^(注7)では中期から後期の土坑や、甕棺墓などが確認されている。

古墳時代の開始期には大肥遺跡A-1区で前期初頭の流路や土坑などが確認され、水場の祭祀の痕跡が見つかっている。現在のところ中期の遺構は確認されていないが、後期には大肥遺跡C区で5世紀後半～6世紀中ごろの竪穴住居群が確認され、住居跡への流れ込みのためや時代が異なるが、繩蓆文土器などの交流を示す資料も発見されている。また、大肥中村遺跡、大肥吉竹遺跡では6世紀中ごろの集落が確認されている。

古墳時代の墳墓群は現在のところ確認されていないが、中島横穴墓^(注8)など周辺の山間部に横穴墓の存在が知られ、また中村遺跡^(注9)では箱式石棺墓の存在が確認されている。未調査であり、



第3図 遺跡分布図 (1/30,000)

詳細は不明で時期も弥生～古墳時代の可能性があるが、河岸段丘の周辺の高台などに墳墓群が存在した可能性が考えられる。

古代には、大肥吉竹遺跡にて7世紀後半～8世紀の大規模な集落跡が見つかっており、「花度太(門田)」銘の朱墨土器や円面鏡の破片、瓦などが発見され、何らかの公的施設の可能性が考えられている。大肥中村遺跡では8世紀代の住居跡が発見されている。また、この地域は条里地割が残る地域として知られており、周知遺跡名も大肥条里遺跡とされている。しかし、近年の発掘調査ではこれら条里地割の痕跡は確認されず、水田の多くは、近世から近代にかけて大幅に改変されていることが分かってきている。『豊後國風土記』によれば、日田郡には5つの郷があり、有田、亘理、父速、石井、夜間の5郷があったと言われており、幾つか研究ではこの地域が夜間郷にあたる可能性も検討されている。また、1285年に書かれた『豊後國図田帳』によれば、大肥川流域は「大肥荘」と呼ばれ、宇佐宮とならぶ安楽寺に寄進された水田地帯であったことがわかっている。この「大肥荘」は『天満宮安楽寺草創日記』によれば1032年、喜多院建立の際に寄進されたことが記述されていることから、それ以前には荘園開発が行われていたようである。^(注10)

中世には、大肥中村遺跡で鍛冶工房や建物群、水田などが調査されている。また、中世墓も見つかっており、竈泉窯系青磁合子や湖州鏡など、多彩な中国系遺物を手に入れることの出来る程、鉄器の流通が盛んであったことが窺い知れる。また、高野遺跡では中世の建物群が調査され、祝原遺跡^(注11)では水田跡、大肥吉竹遺跡では中世の水田層が見つかっている。大肥荘の時代の脈をこれらの遺跡は物語っている。

近世では大肥中村遺跡で江戸時代前期の建物群が見つかっており、祝原遺跡でも建物群が調査されている。

このように近年の調査により、多彩な遺跡の存在が明らかになりつつある大肥川流域は、九州の交通の要所である日田の西の玄関口として、古く縄文時代から現代にいたるまで脈々と生活が営まれ、また日田の歴史を解明する重要な地域となりつつあるのである。

《参考文献》

- 註1) 行時志郎 「大肥条里下河内地区」『平成12年度（2000年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001
- 註2) 渡邊隆行 「大肥吉竹遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第48集 日田市教育委員会 2004
- 註3) 若杉竜太 「大肥条里祝原地区」『平成11年度（1999年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001
- 註4) 渡邊隆行 「大肥条里大肥地区」『平成14年度（2002年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2003
- 註5) 「大肥遺跡I—A-1区の調査の記録」日田市埋蔵文化財調査報告書第50集 2004
- 註6) 行時志郎 「大肥中村遺跡—発掘調査概報一」日田市教育委員会 2003年
- 註7) 若杉竜太 「高野遺跡」『平成15年度（2003年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004
- 註8) 横穴の開口が確認されている。
- 註9) 工事中に発見されている。(『日田市史』 日田市 1990)
- 註10) 『日田市史』 日田市 1990
- 註11) 行時桂子 「祝原遺跡」『平成15年度（2003年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004

III 調査の記録

(1) 調査の概要

調査区は大肥川の右岸の矮小な河岸段丘上に位置し、国道と小さな谷によって東西に寸断されている。このうち、掘削対象となる箇所を南西から順番にA区、B区、C区と地点を定めて調査を実施した。

調査区の面積はA区は約1,400m²、B区は2,500m²、C区は3,200m²（総計7,100m²）をそれぞれ測り、国道に寸断されて南北に長い調査区となっている。調査区内での標高はA区が約79m、B区が約78m、C区が約79mとなっている。遺構が検出された地山は各区ごとに異なっており、A区は小礫を多く含む黄褐色砂質土、B区は南側が褐色砂質土、北側が小礫を多く含む暗赤褐色ローム土、C区は黄褐色砂質土であった。この周辺の小さな谷を挟む複雑な地形により地盤の形成状況が異なるものと思われる。

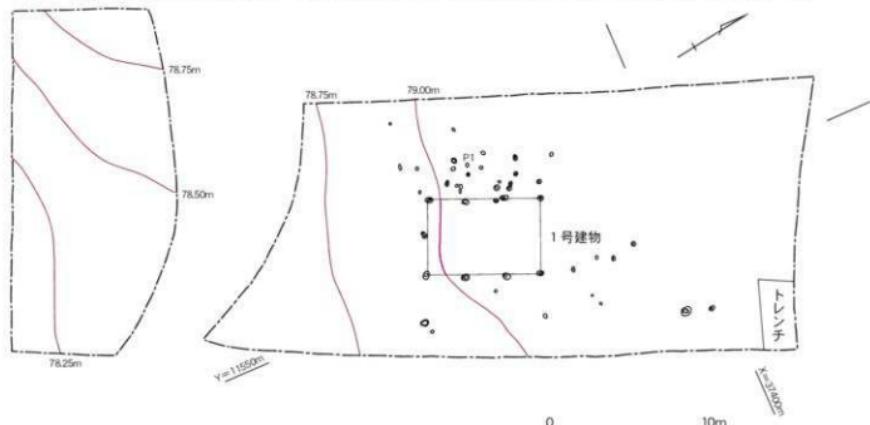
以下各調査区毎に説明を加える。

(2) A区の調査（第4図、図版1）

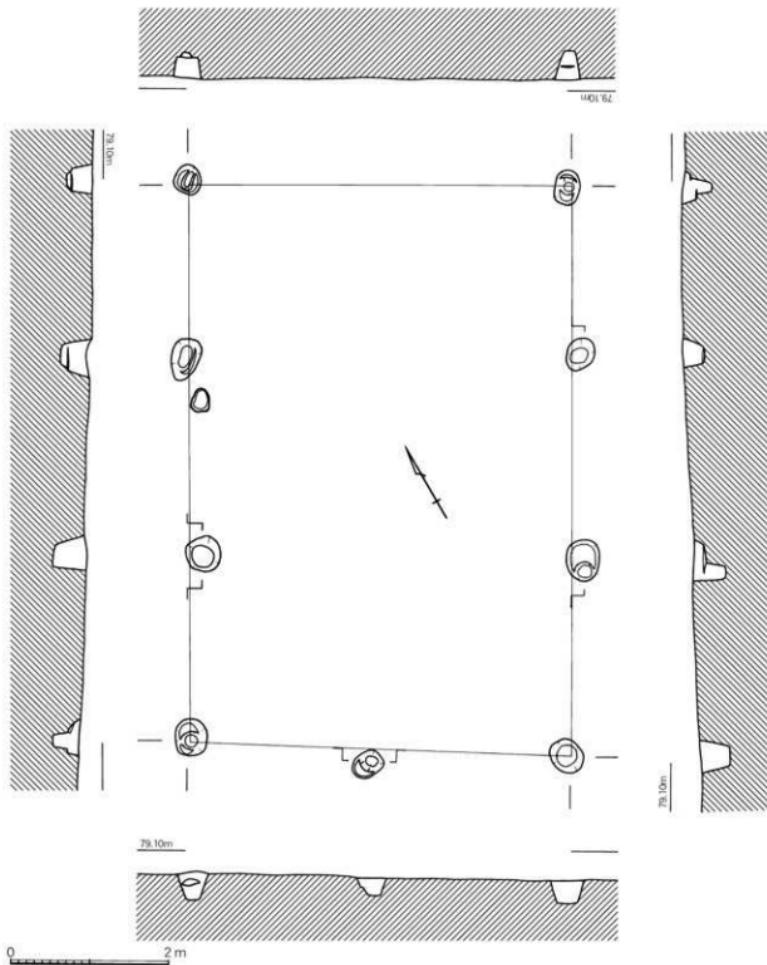
この調査区から検出された遺構は掘立柱建物1棟、ピットである。これらの遺構は北側に固まっており南側に進むにしたがって密度が薄くなっていた。地山は黄褐色土であり、これらに灰褐色土の埋土の遺構が検出された。遺構面のほとんどが削平を受けており、近年の水田構築の際に盛土をしたものと思われ現況基盤層より下に暗黃褐色礫層の盛土が確認された。南側には一部地山直上に遺構埋土と同質の灰褐色土の堆積層が確認された。

1号掘立柱建物（第5図、図版1）

調査区中央にて検出され、主軸方向をN-E30°にとる1間×3間の掘立柱建物跡である。南側に確認された桁行間のピットは深さも浅く、やや軸からもズレることから建物に伴わないと判断した。検出面での柱穴は約40~45cmの円形を呈し、深さは深いもので約45cmを測る。桁行方向の柱

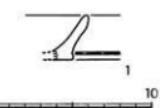


第4図 A区遺構配置図 (1/300)

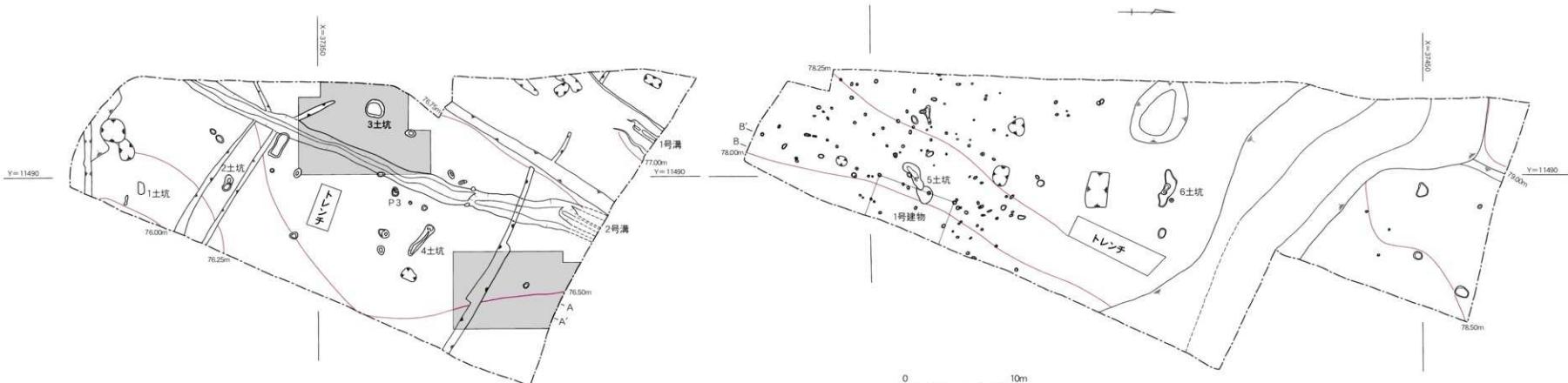


第5図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

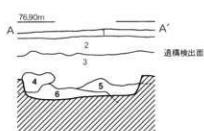
穴間の距離は約2.4m、梁行方向の柱穴間距離は約4.8mを測り、心心距離で南北長軸で約7.2m、東西短軸で約4.8mを測る。遺物の出土は見られなかったが、周辺の柱穴では土師皿が出土しており、埋土もほぼ同一と考えられることから、中世時期と考えられる。



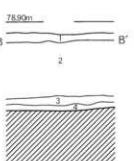
第6図 A区出土遺物実測図 (1/3)



第7図 B区遺構配置図 (1/300)



第8図 基本土層図 (1/40)



第9図 基本土層図 (1/40)

柱穴出土遺物（第6図、図版23）

多数の柱穴が検出されたが、何れも灰褐色埋土であり、ほぼ同一の時期の所産であると考えられる。柱穴1より土師器皿の出土がみられた。底部から口縁部にかけてやや直立し、内湾ぎみを呈する。底端部は外に張り出し、底端部上面に一条の沈線を巡らせる。底面には糸切り痕が残る。

(3) B区の調査（第7図、図版2）

この調査区は里道を挟み南北に分断されている。検出された遺構は掘立柱建物1棟、溝2条、土坑6基、柱穴、遺物包含層である。北側に建物や柱穴が多く見られ、南側は遺構密度がやや希薄であった。検出された遺構埋土は南側で暗灰褐色土、北側では淡黒褐色土であった。遺構が検出された地山は南側が黄褐色砂質土で、北側が小礫が多く混じる暗赤褐色ローム土と両地点で地山が異なっていた。特に南側地点の東は掘削をうけていたものと思われ、北側の地点内では北よりの箇所に自然の谷が形成されていた。この谷は調査区西側にある山地より流れ出る水を大肥川へと流す小川のようなものであったものと考えられる。その後近年埋められていたものと考えられ、バラスが大量に流入していた。

基本層序

南側（第8図）では現況基盤層（1層）下部に黄褐色粘質砂層（2層）の盛土が堆積しており、その下部に遺構検出面である褐色砂質土層（3層）が堆積していた。この褐色砂質土層は縄文時代の遺物包含層であり、その下部には黄褐色砂質土（4層）や淡黒褐色砂質土（5層）、暗黄褐色砂質土層（6層）が堆積しており、これらは砂性の強い層であることから、大肥川の氾濫により堆積した層と考えられる。

北側（第9図）では現況基盤土（1層）下部に小礫を多く含みしまりのない暗赤褐色（2層）の盛土が堆積しており、その下面に暗褐色（3層）、淡黒褐色土（4層）が堆積していた。この下面が遺構検出面の小礫を含む暗赤褐色土となり、遺構埋土は4層に近い土が多くみられた。

1. 掘立柱建物

1号掘立柱建物（第10図、図版3）

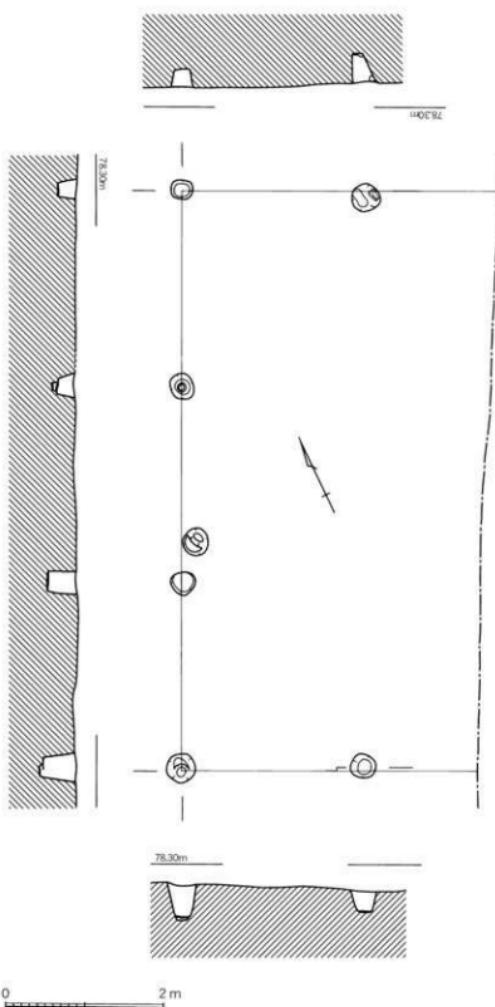
調査区北側地点東側にて検出され、主軸方向をN-E26°にとる2間以上×3間の掘立柱建物跡である。東側の柱穴群は調査区外へと伸びている。検出面での柱穴は約30～40cmの円形を呈し、深さは深いもので約45cmを測る。梁行方向の柱穴間の距離は約2.5m、桁行方向の柱穴間距離は約2.3mを測り、心心距離で南北長軸で約7.3mを測る。遺物の出土は見られなかったが、試掘時に建物周辺の柱穴より土師皿（第15図21）が出土しており、この柱穴と建物の埋土はほぼ同様と考えられることから、中世の建物と考えられる。

2. 溝

調査区南側地点より2条の溝が検出されている。何れも大肥川に平行した方向に流れている。

1号溝（第11図、図版3）

調査区南側地点西側より検出された溝で、その大半を近年の搅乱により削平されていた。調査区内での長さ約4.3m、検出面での幅は残りの良いところで1.5m、検出面からの深さは深いところで



第10図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

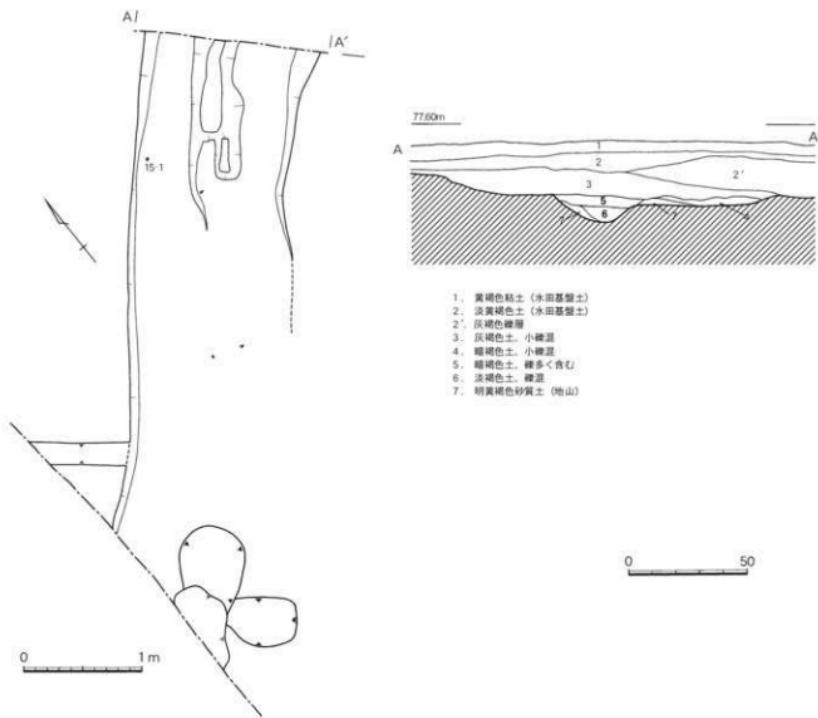
20cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈し、溝中央付近が断面逆台形状の2段掘りが形成される。やや北東側に向かって低くなっている。北東側に向かって流れていると考えられる。埋土は灰褐色土(3層)が上面に乗り、下面には暗褐色土(5層)、淡褐色土(6層)が堆積する。下面には鉄分の沈殿は確認されず、この溝に水が流れていた頻度は判断することはできなかった。

出土遺物 (第15図、図版23)

1は青磁碗である。見込みにヘラにて草花文が施される。外面の文様の有無は確認できない。2は青磁碗の口縁部である。口縁部はやや外に開き、口唇部を緩やかに外反させる。3は攪乱部より出土した土師器小皿である。底面には糸切り痕が残る。

2号溝 (第12図、図版5)

調査区南側地点中央より検出された溝で、調査区を南北に流れる。調査区内での長さ約39m、検出面での幅は広いところで2.2mを測り、検出面からの深さは20~50cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈し、北東側に向かって深くなっていることから、北東に流れているものと考えられる。埋土は暗灰褐色粘質土(1層)、淡暗灰褐色粘質土(2層)がレンズ状に堆積し、自然とこの溝が埋まつたことを物語っている。鉄分の沈殿もなく水の流れた痕跡は確認で

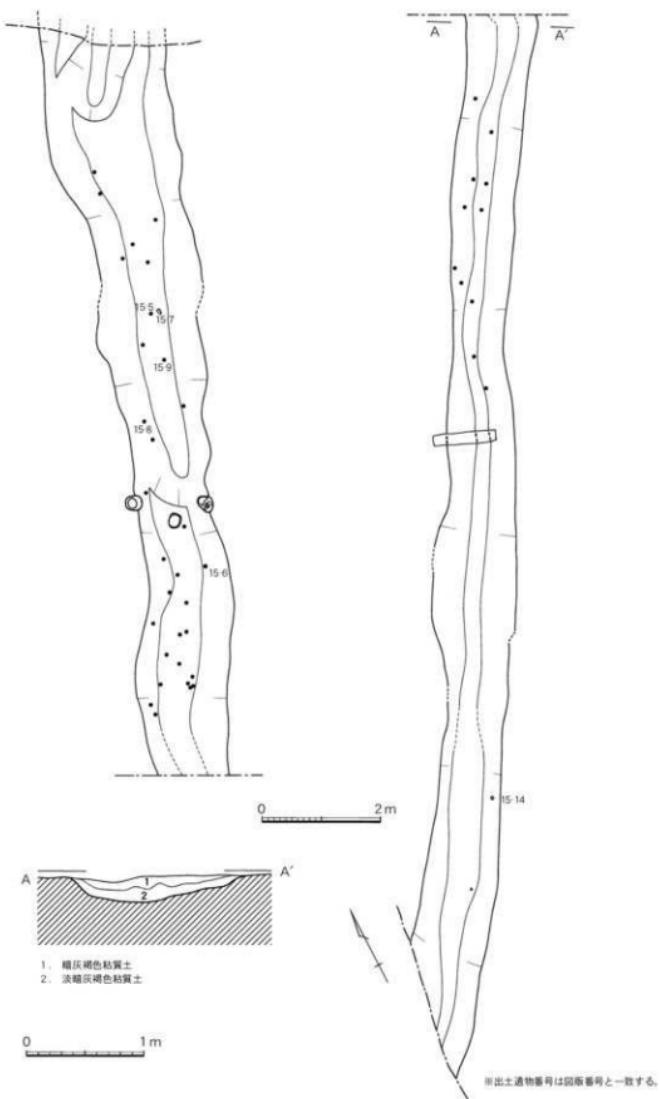


第11図 1号溝実測図 (1/20、1/40)

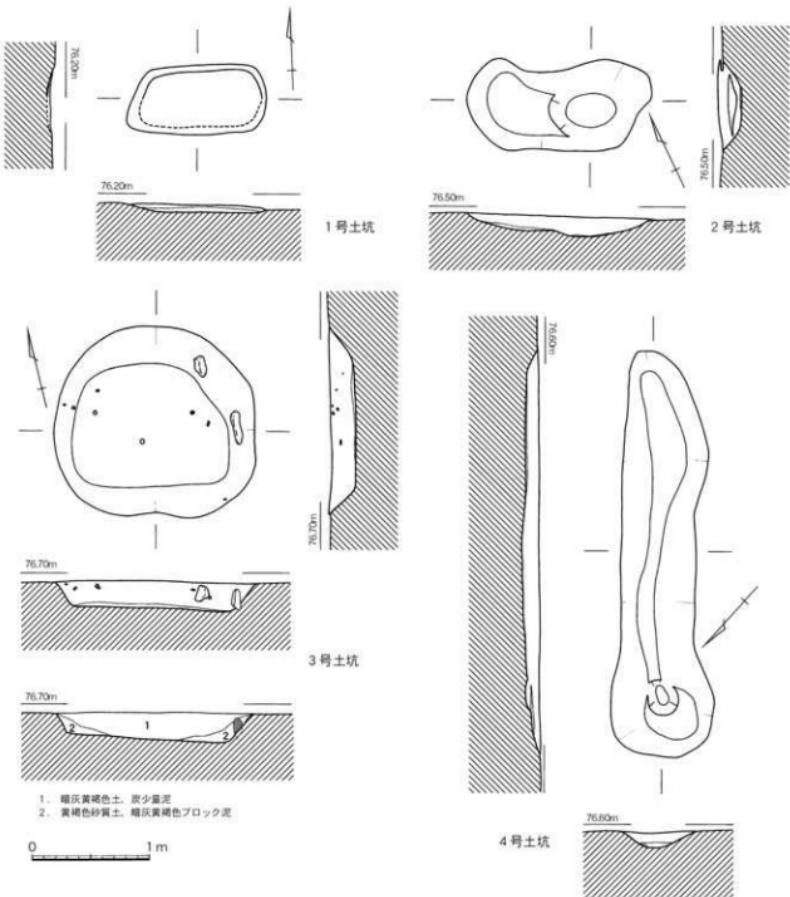
きなかった。

出土遺物（第15図、図版23）

出土遺物はほとんどが縄文土器で、前期の轟式土器が多く見られるものの、一部晩期の遺物も見られる。4～9は轟B式土器の深鉢の破片である。いずれも口縁部下部に隆起帯文（いわゆるミズバレ文）を形成している。条痕の上に粘土を貼り付けたものと思われ、内面では6、7などにおいて横方向の条痕が確認される。10は弧状の微細隆起帯文を貼り付けており、連弧状の隆起帯文の轟B式土器と考えられる。11は深鉢の口縁部と考えられるが、残存する口縁部のカーブからやや径が小さな鉢の可能性が考えられる。内外ともに粘土紐による輪積み痕が顕著に残存している。焼きも非常によく暗赤褐色を呈している。12は晩期黒川式の浅鉢である。口縁部下部にて屈曲し、口縁部は外反する。13は晩期黒川式の浅鉢である。やや外に開き、口唇部は内湾し、内面端部に稜を形成する。14は縄文土器の底部である。上げ底気味で、底端部を下方に作り出している。15は縄文土器の底部である。平底気味を呈している。



第12図 2号溝実測図 (1/40, 1/80)



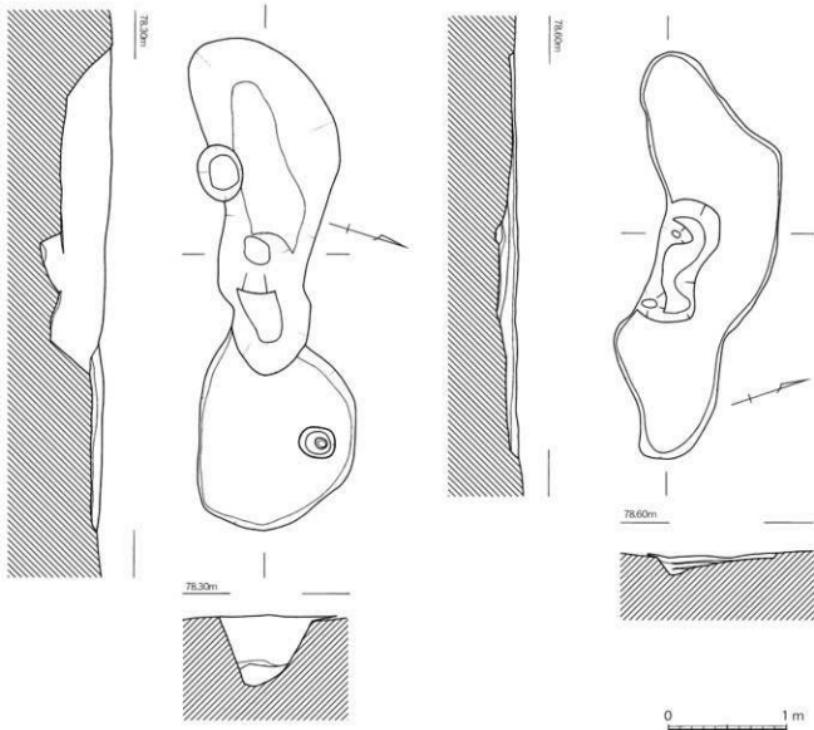
第13図 1、2、3、4号土坑実測図 (1/40)

3. 土坑

土坑は南地点では浅いものが多く、埋土は暗灰褐色土を呈しており、北地点では不定形のものが多く、埋土は淡暗黒褐色土を呈していた。

1号土坑（第13図、図版6）

調査区南地点にて確認され、確認面での規模は東西幅約120cm、南北幅約60cmを測る不正方形の土坑である。断面形は浅いレンズ状を呈する。遺物の出土は見られなかった。



第14図 5、6号土坑実測図 (1/40)

2号土坑（第13図、図版7）

調査区南地点にて確認され、確認面での規模は東西幅約155cm、南北幅約80cmを測る不正形を呈する。西側にテラスを持ち、段落ち状を呈する。

出土遺物（第15図、図版23）

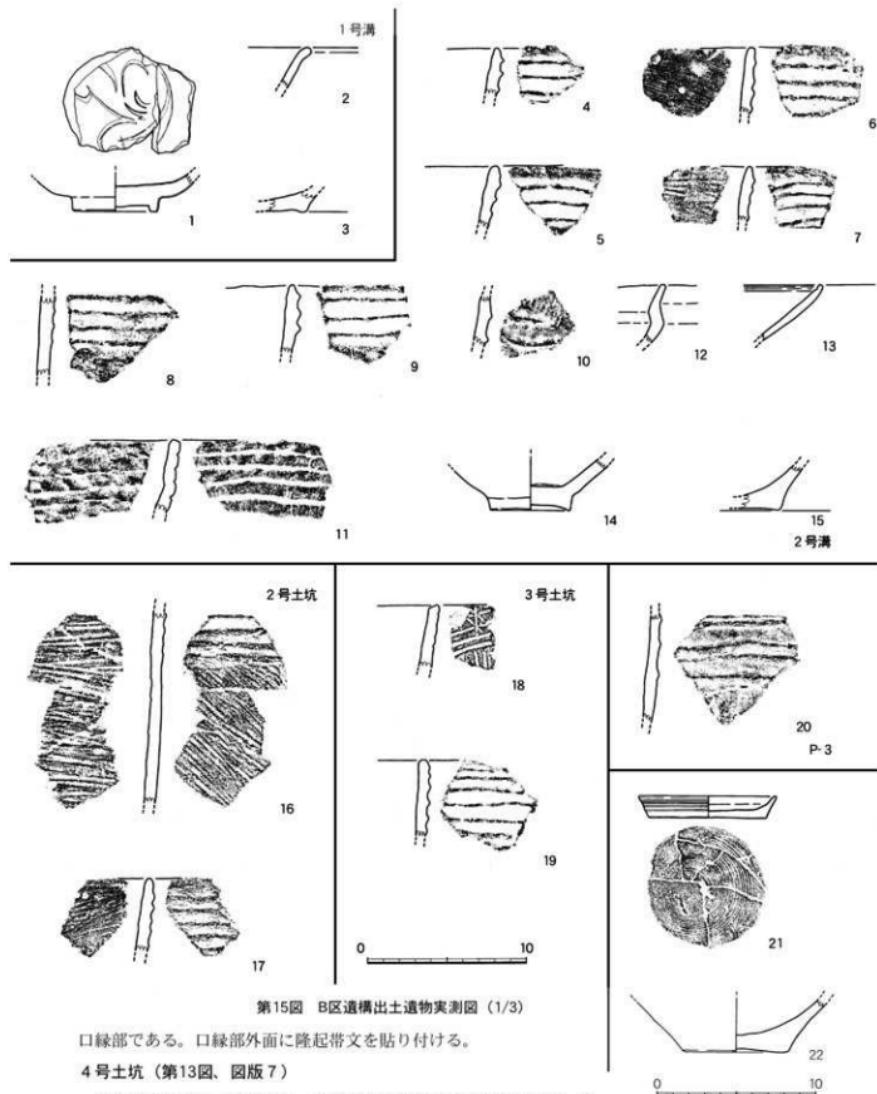
16は轟B式土器の深鉢である。内外ともに条痕を施し、外面には隆起帶文を貼り付ける。17は轟B式の深鉢である。外面に隆起帶文を施し、内面には条痕が施される。

3号土坑（第13図、図版7）

調査区南地点にて確認され、確認面での規模は東西幅約170cm、南北幅約160cmを測る梢円形を呈する。断面形は逆台形状を呈する。

出土遺物（第15図、図版24）

18は曾畠式土器の口縁部である。外面に斜位沈線文および縱位沈線文を施す文様区画が形成されたものと思われる。内面はナデ調整である。胎土には滑石が含まれる。19は轟B式土器の深鉢の



第15図 B区構出土遺物実測図 (1/3)

口縁部である。口縁部外面に隆起帯文を貼り付ける。

4号土坑 (第13図、図版7)

調査区南地点にて確認され、確認面での規模は南北幅約340cm、東西幅約85cmを測る不正長方形を呈する。断面形は浅いレンズ状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

5号土坑（第14図、図版8）

調査区北地点にて確認され、確認面での規模は東西幅約420cm、南北幅約100cmを測る不正形を呈する。東側にある浅い凹みは土坑状を呈しており、埋土の違いがなかったことから、付随するものとして図化している。遺物の出土は見られなかった。

6号土坑（第14図、図版8）

調査区北地点にて確認され、確認面での規模は東西幅約340cm、南北幅約110cmを測る不正形を呈する。断面形は浅いレンズ状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

4. 柱穴

多数の柱穴が確認されたが、遺物の出土したものはほとんど見られず、P-3より縄式土器の破片が出土した。

出土遺物（第15図、図版24）

21は縄B式土器の胴部破片で微細隆起線文が施される。

5. その他の遺物（写真12、13）

ここでは事前の試掘調査において出土した遺物を紹介する。B区北地点の試掘調査において1号建物より北側に位置する柱穴から遺物の出土が見られている。この柱穴の位置は確定しえないが、柱穴埋土は周辺に所在する柱穴群と同一であり、建物群の柱穴もほぼ同様の埋土を示すことから、この遺物は柱穴群に伴うものとして考えられる。また、B区北地点より東側の13トレンチ（第2図参照）より縄文土器の出土が見られている。南地点にて確認された縄文時代の包含層がこちらまで伸びていた可能性が考えられる。

出土遺物（第14図、図版24）

22は土師器小皿である。口縁部は直立気味に立ち上がり、外湾気味を呈する。底部は明瞭に作り出し、底面には糸切り痕が明瞭に残る。23は縄文土器の底部である。上げ底状を呈する。底径は7.7cmほどを測る。



写真12 B区試掘調査



写真13 土器出土状況

6. 繩文土器包含層

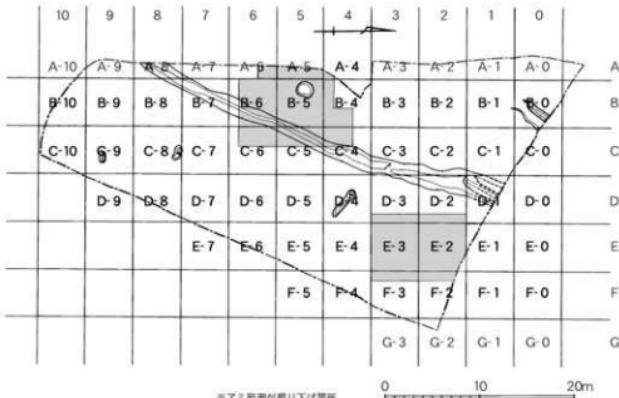
調査区南地点において遺構検出面の黄褐色砂質土に縄文土器が包含されることが確認された。いくつかトレンチを設定して掘り下げたところ縄文時代の包含層であることが明らかとなった。そこで、調査区南地点にグリットを設定（第16図）し、遺構面に遺物が集中して見られる箇所についてグリットの掘り下げを実施した。この包含層の掘り下げは、遺物の集中して見られる箇所に遺構が所在するかどうか、また包含層の堆積状況と遺物の出土状況を明らかにする目的で実施することとした。その他の箇所について遺物の包含状況がほとんど見られないことから、対象とするのは3号土坑周辺のB5グリットを中心とした範囲とE2グリットを中心とした範囲に絞ることとした。

A4～C6グリット（第17図、図版8～10）

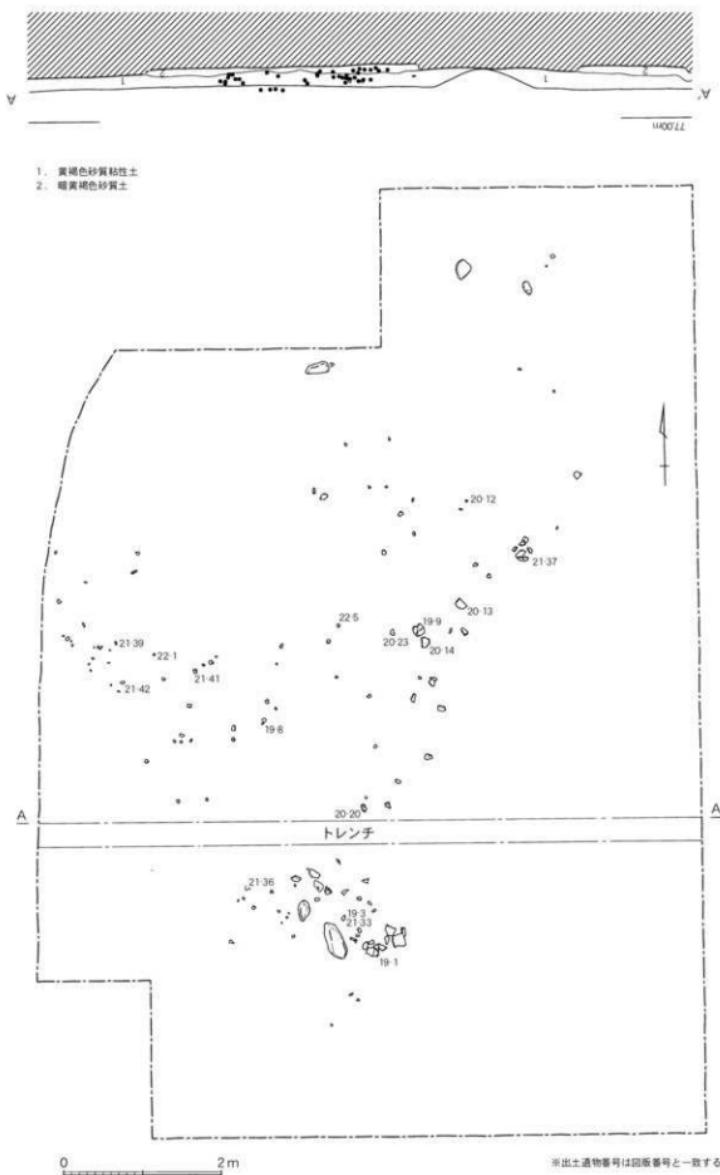
B5グリットを中心として掘り下げを実施するなかで、次第にその周辺に遺物の包含が確認されたことから、A4、A5、A6グリットを広げ、西側に遺物の包含が広がることが確認された。東側にはほとんど遺物は広がらず、C4、C5、C6グリットの一部を広げて遺物の広がりが認められないことが確認された。この包含層の土層堆積状況は黄褐色砂質粘質土（1層）がやや水平状に堆積し、その下層に暗黄褐色砂質層（2層）が堆積していた。この内、1層に遺物の包含が多く認められ、2層下部には遺物の包含はあまり認められなかった。また、一部石が一緒に堆積をしていたが、集石などの遺構を確認することはできなかった。遺物は特にB5グリットを中心に包含しており、梢円状に散乱していた。

D3～F3グリット（第18図、図版11～12）

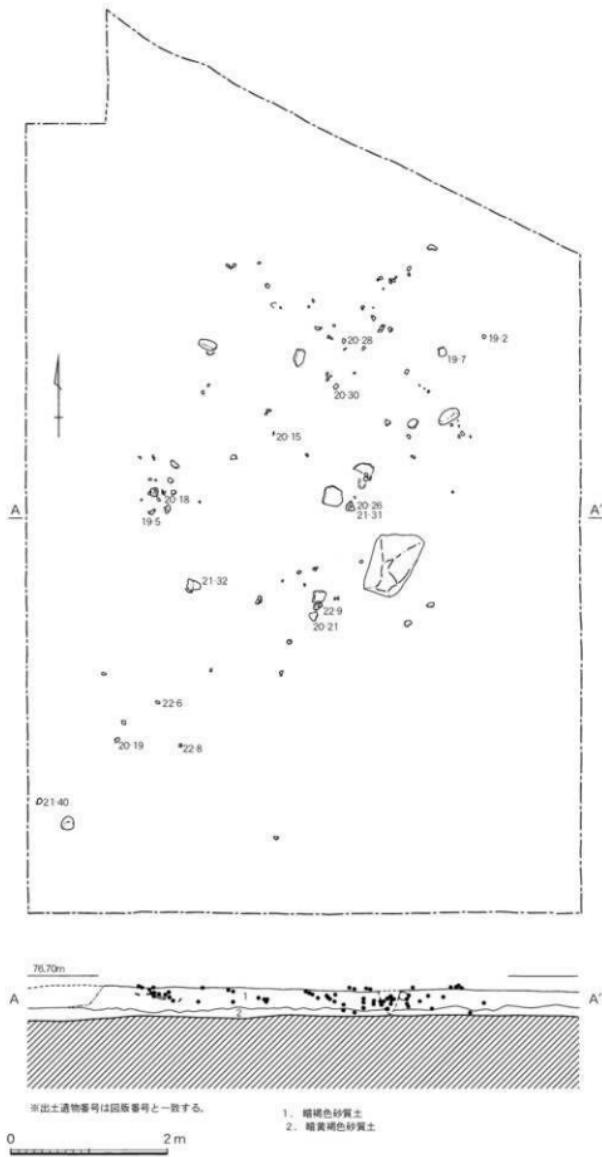
E2グリットを中心に掘り下げを実施したが、隣接のE3グリットまで遺物の包含が確認され、その広がりを確認するためD2、D3、F2、F3の一部を広げて包含範囲を確認した。このグリットの土層堆積状況は暗黄褐色砂質土（1層）がやや水平状に堆積し、その下層に暗黄褐色砂質土（2層）が堆積していた。2層には遺物は殆ど含まれず、1層に多くの遺物が堆積していた。大きな石の流入なども確認されたが、遺構の痕跡は認められなかった。遺物はE2グリットを中心にやや西よりに梢円状に散乱していた。



第16図 縄文時代包含層グリット割図 (1/500)



第17図 A 4～C 6 グリッド実測図 (1/60)



第18図 D3~F3 グリット実測図 (1/60)

これらの両グリットの状況から、以下の特徴が挙げられる。

1. 遺物は不定円形状には堆積するものの、その広がりは明瞭ではないことから、遺構の存在は想定しえない。
2. 遺物の集中は西側に多く見られるところから、山裾側に多く見られる傾向を示している。
3. 遺物は暗褐色砂質土層に殆どが含まれ、この層は砂性が強く、河川の氾濫などに伴って堆積した可能性が考えられる。

以上のような特徴から、縄文時代の包含層は、大肥川の氾濫に伴いこの一帯が流された際、周辺部より流れ込んだ遺物である可能性が高く、2の特徴などから、より標高の高い西側の山側の段丘上から流入し、その山裾に堆積した可能性が想定される。



第19図 包含層出土土器実測図① (1/3)

包含層出土土器 (第19、20、21図、図版24~26)

包含層より出土した遺物の全てが縄文時代前期に所属すると考えられる。主に轟B式土器と曾畠式土器で、そのほかに条痕文土器などが含まれる。遺物の出土状況もこれらの特徴ごとの傾向は検出できず、それぞれが同時に流入しているようである。

以下各遺物について解説を加えるが、轟式に関してはローリングも激しく器壁表面の摩滅が著しい遺物が多く見られたことから、隆起線文の形状について分類基準からは除外している。

以下の文様構成からその特徴を6つに分類した。

- 1類 口縁部に隆起帯文を持つ轟B式土器で口縁部に5条以上の隆起帯を多条に巡らせるもの。
- 2類 口縁部に隆起帯文を持つ轟B式土器で口縁部に4条以下の隆起帯を数条巡らせるもの。
- 3類 轟B式土器であるが、破片であるため、1類、2類に区分けできなかったもの。
- 4類 口縁部に隆起帯文を持つ轟B式土器で、隆起帯が連弧条を呈するもの。
- 5類 無文で、条痕などによって構成されるもの。
- 6類 無文に豆粒状の突起を貼り付けるもの。
- 7類 鋸歯状の沈線文によって区画される曾畠式土器

1類 1～9が該当する。口縁部に多条の隆起帯文を施しており、特に1や2に顕著に見られる。これらの多くは隆起帯の断面形がシャープな三角形を呈するものが殆どで、隆起線文間の幅が短い特徴が見られる。唯一9はやや隆起に乏しく微細隆起帯文のような形態を呈している。いずれも内外ともに条痕を施しており、内面は横方向で外面は斜め方向の条痕を呈しているものが多く見られる。7は内面に斜め方向の条痕を施したのち、口縁部付近に横方向の条痕を施している。また、7には口縁部端部に刻みが巡らされる。

2類 10～15が該当する。口縁部に数条の隆起帯文が施されており、3条ほどのものが多く見られる。13などに特徴的であるが、隆起帯断面形は三角形を呈するが、1類に比べるとややそのシャープさに欠けている傾向がある。内外ともに条痕が施され、内面は横方向の条痕、外面は斜め方向の条痕が施される。

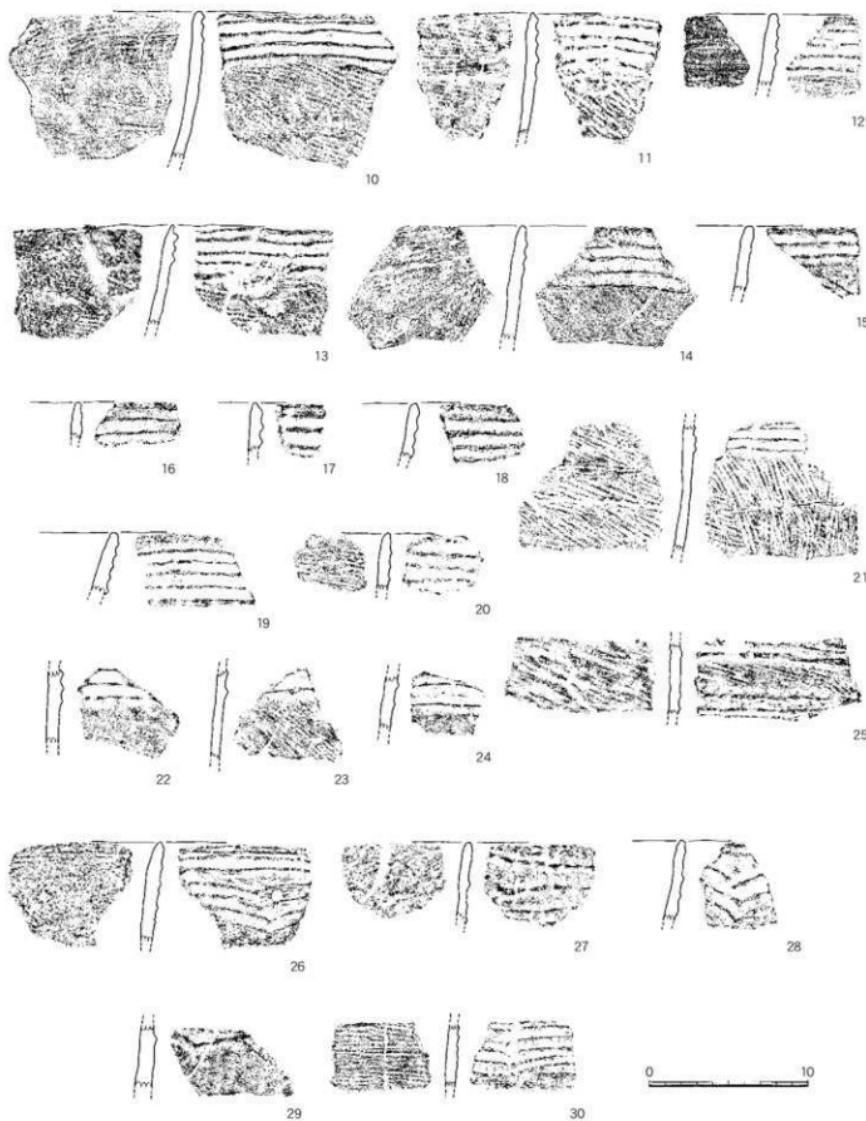
3類 16～25が該当する。口縁部に隆起帯文が施されると考えられるが、その条数は不明なものである。17や18は隆起帯の断面形が薔薇鉢状を呈している。25は胴部の破片と考えられ、上面に2条の隆帯を施し、やや間隔をおいて下面に2条の隆帯を貼り付けている。21、23にみられるように外面には斜め方向の条痕が施されるが、内面は20は横方向、21、25では斜め方向の条痕が施されるようである。

4類 26～30が該当する。口縁部に隆起帯文が施され、連弧状を呈すると考えられる。その連弧の形成は多様なようで、26では2状の隆帯の下部から連弧文が形成され、27では全ての隆帯が連弧を呈する。28は弧を描く角度がきつく、30は緩やかである。内面に横方向の条痕が施されるようである。26には補修孔と考えられる孔が一穴開けられている。

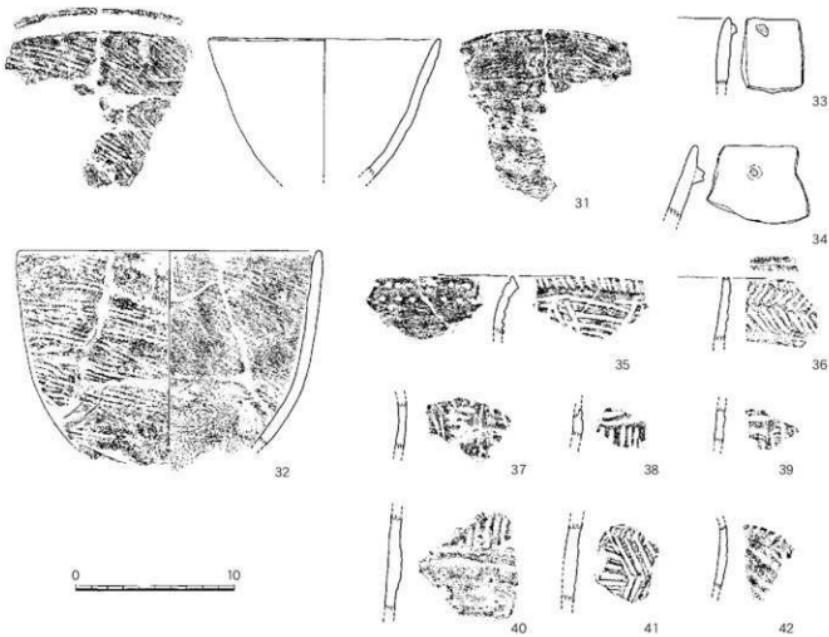
5類 31、32はやや条痕が顕著に施される小型の鉢で、口径を復元すると31が14.6cm、32が19.2cmを呈する。内外面にはやや斜め方向の条痕が施される。31は口縁頂部に刻みが施される。

6類 33、34は口縁部下部に豆粒状の隆起粘土を貼り付けている。内外ともに調整は不明であつた。

7類 35～42が該当する。滑石を含む曾畠式土器であるが、唯一39のみが滑石が含まれていない。35は口縁部が外反し、口唇部に文様帶が作り出される。文様帶には沈線による刻目が巡らされ、内面には刺突列点文が2段巡らされる。外面には横位平行沈線が巡り、その上から斜め方向の平行沈線文が施される三角文様区画が形成されると考えられる。36は口縁部頂部に沈線が巡られ、口縁部外面には横位沈線により文様帶が形成され、その中を沈線による羽状文状の文様が充填される。37～40は一部ローリングのため不明瞭であるが、横位平行沈線と縦位平行沈線による文



第20図 包含層出土土器実測図② (1/3)



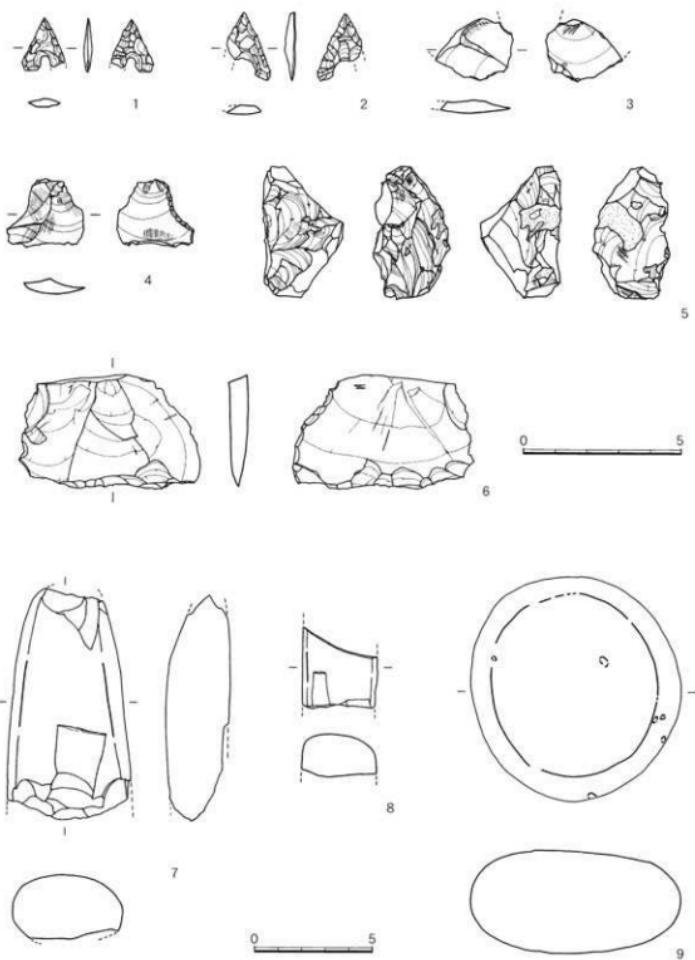
第21図 包含層出土土器実測図③ (1/3)

様区画が形成されるようである。41、42は斜位平行沈線が三角形状に施され、41には横位平行沈線が充填されている。

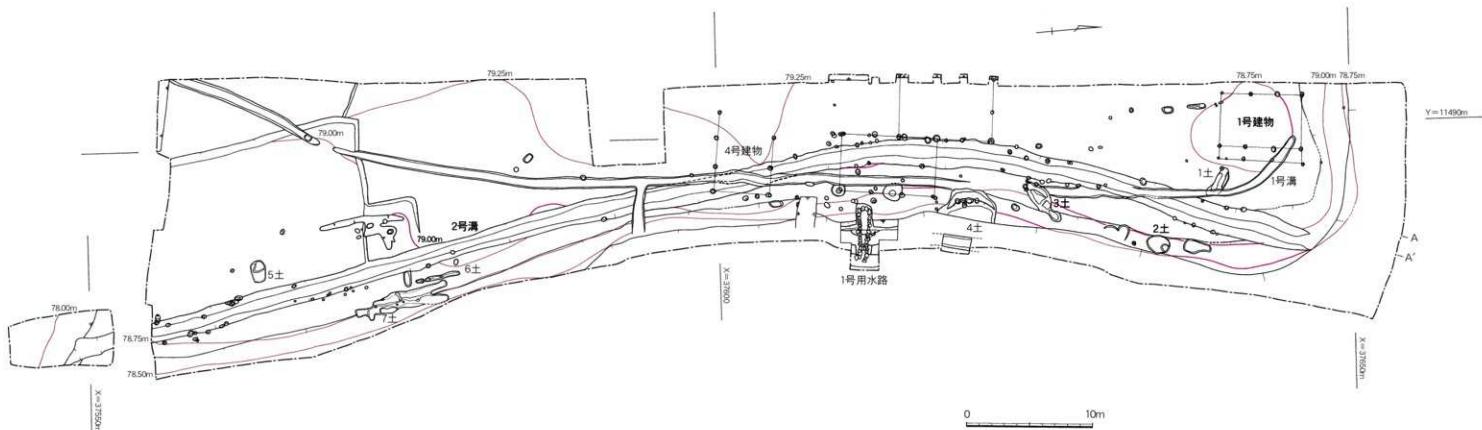
7. 石器 (第22図、図版26、27)

石器の出土量はB区を通じてそれほど多くなく、ここでは各造構から出土した石器をまとめて報告する。

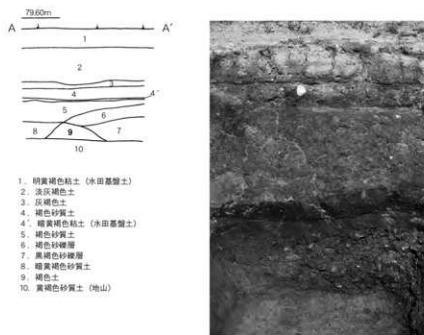
1は包含層B5グリットより出土した安山岩製の凹基無茎石鏟である。基部に一部欠損が見られる。2は1号溝より出土した安山岩製の凹基無茎石鏟である。基部に一部欠損が見られる。3は2号溝より出土した黒曜石製の2次加工剥片である。ポジ面には打瘤が残る。4は2号溝より出土した黒曜石製の2次加工剥片である。ポジ面には打瘤が残り、ネガ面からポジ面に欠けてプランティグが施される。5は包含層B5グリットより出土した黒曜石製の石核である。やや荒い粒子を含む黒曜石で、剥離は多方向から行われている。6は包含層E3グリットより出土した安山岩製のスクレイパーである。ポジ面には打瘤が残る。7は2号溝から出土した安山岩製の磨製石斧である。刃部、基部ともに欠損している。8は安山岩製の磨製石斧である。基部、刃部ともに欠損しており、下面も剥落している。9は安山岩製の磨石である。上、下面ともにスレが残り、一部上面に敲打痕が見られる。



第22図 B区出土石器実測図 (2/3、1/2)



第23図 C区造構配置図 (1/300)



第24図 基本土層図 (1/40)

写真14 基本土層

(4) C区の調査（第23図、図版13）

この調査区は最も北側に位置しており、検出された遺構は掘立柱建物4棟、溝2条、用水路1条、土坑7基、柱穴である。調査区内を溝が南北に走っており、遺構は北側に多くみられた。検出された遺構埋土は淡黒褐色土であった。

遺構が検出された地山は黄褐色砂質土である。調査区北側と南側の一部（約1mほど）は極端に傾斜がついており、その上面には近世の盛土層が乗っていた。あまりにこの地点が下がっており、また水が湧き出すなどの事態がおきたため、調査での安全性確保などの問題から中途で掘り下げをとめ、この部分には関しては工事による掘削が及ばないことから、部分的な確認を実施することに対応した。

また、調査区南側沿いに簡易道路が設置されるとのことであったことから、調査対象からはずしていたが、工事の際に立ち会うこととした。立会いにおいて、溝の端が確認されたが、掘削が及ばないとのことから、遺構の確認を行って埋め戻しを実施した。

基本層序（第24図、写真14）

現況基盤層（1層）下部に淡灰黒褐色土（2層）の盛土が堆積しており、その下部旧水田層と思われる灰褐色土層（3層）、黒褐色土層（4層）、暗黃褐色粘土層（4'層）が堆積していた。褐色砂質土（5層）、褐色砂礫層（6層）が堆積し、その下面には8層～9層の盛土層が堆積し、地山と考えられる黄褐色砂質土（10層）が検出された。

1. 掘立柱建物

建物は調査区北側に多く見られ、その殆どが1、2号溝を切って建てられており、建物の何れも主軸をほぼ同じくしていた。

1号掘立柱建物（第25図、図版14）

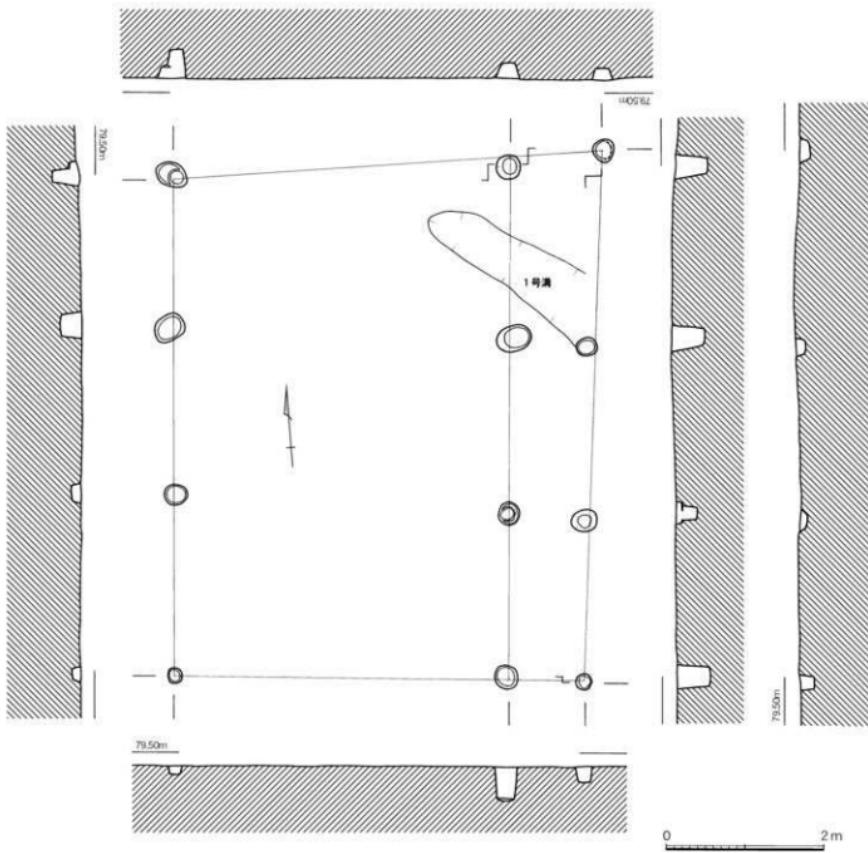
調査区北側にて検出され、1号溝を切り、主軸方向をN-W5°にとる南面庇を持つ1間×3間の掘立柱建物跡である。検出面での柱穴は約20～40cmの円形を呈し、深さは深いもので約45cmを測る。梁行方向の柱穴間の距離は約2.2m、桁行方向の柱穴間距離は約4.3mを測り、心心距離で南北長軸で約6.5m、東西短軸で約4.3mを測る。庇までの距離は約1mを測る。遺物の出土は見られなかった。

2号掘立柱建物（第26図、図版14）

調査区中央部や北側にて検出され、2号溝を切り、主軸方向をN-W5°にとる1間×3間の掘立柱建物跡である。検出面での柱穴は約30～55cmの円形を呈し、深さは深いもので約60cmを測る。梁行方向の柱穴間の距離は約2.5m、桁行方向の柱穴間距離は約4.6mを測り、心心距離で南北長軸で約7.6m、東西短軸で約4.6mを測る。遺物の出土は見られなかった。

3号掘立柱建物（第27図、図版14）

調査区中央部や北側にて検出され、2号溝を切り、主軸方向をN-W5°にとる1間×3間の掘立柱建物跡である。西側の梁行方向の柱穴群は近年の擾乱により大幅に掘削を受けており、真ん中の2穴は確認することが出来なかった。2号掘立柱建物と重複しているが、切り合い関係は不明である。検出面での柱穴は約30～55cmの円形を呈し、深さは深いもので約40cmを測る。梁行方向の柱穴間の距離は約2.5m、桁行方向の柱穴間距離は約5.0mを測り、心心距離で南北長軸で約7.5m、

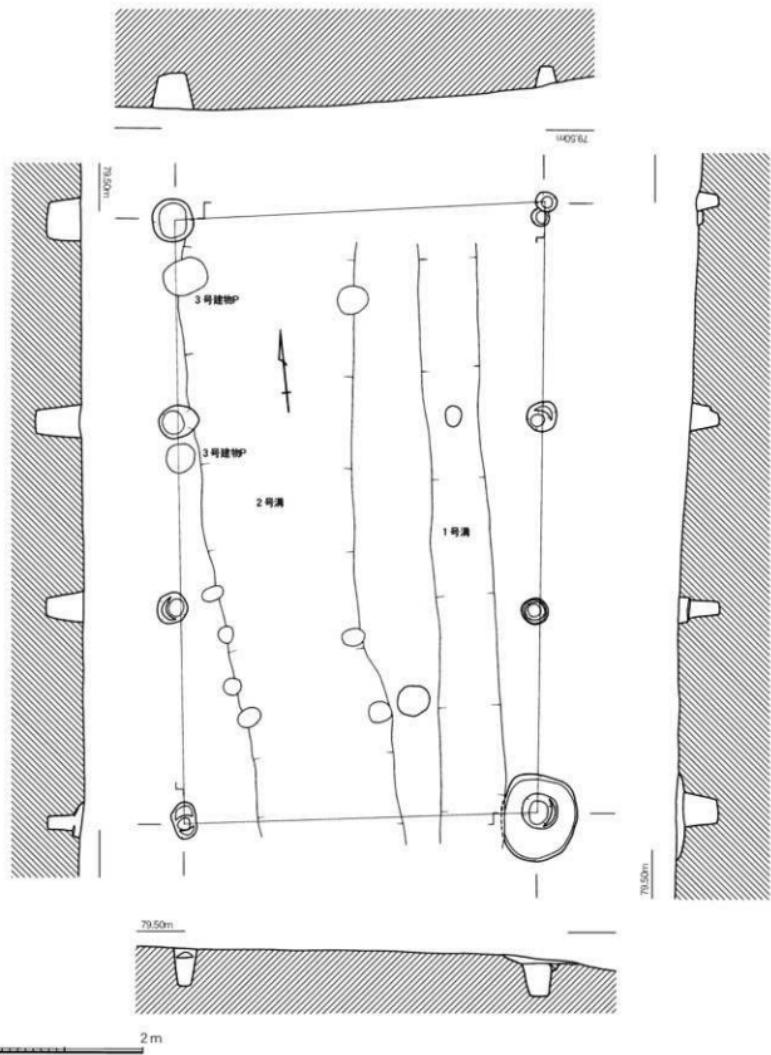


第25図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

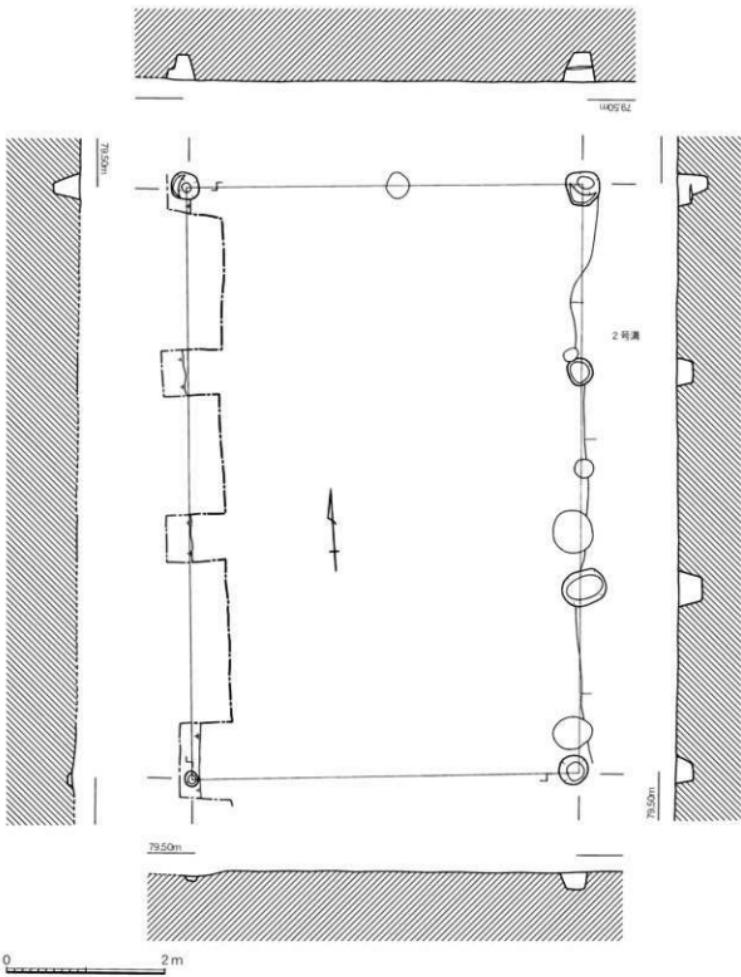
東西短軸で約5.0mを測る。遺物の出土は見られなかった。

4号掘立柱建物 (第27図、図版15)

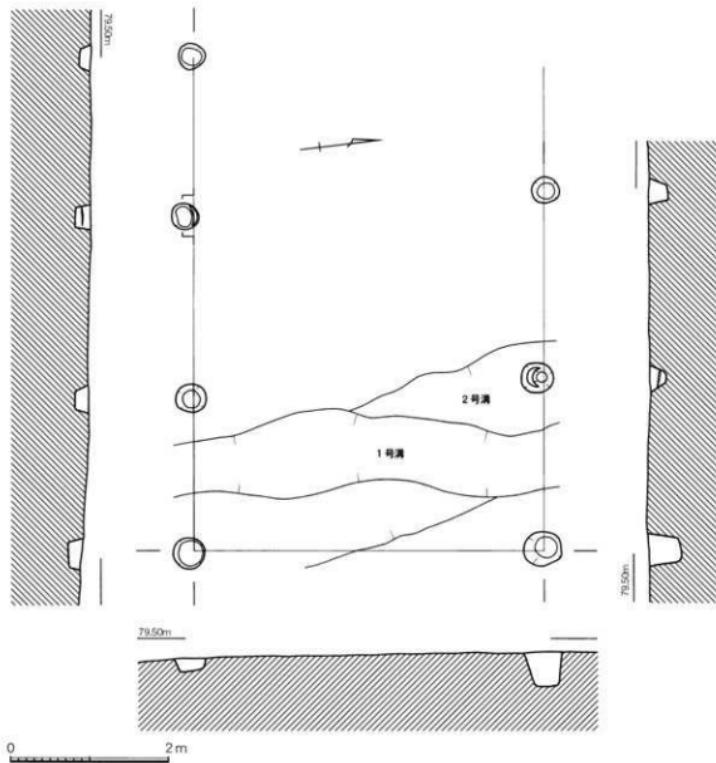
調査区中央部にて検出され、2号溝を切り、主軸方向をN-W83°にとる1間×3間以上の掘立柱建物跡である。北側梁行方向の柱穴端は削平を受けており、確認することが出来なかった。検出面での柱穴は約30～50cmの円形を呈し、深さは深いもので約40cmを測る。梁行方向の柱穴間の距離は約2.0m、桁行方向の柱穴間距離は約4.5mを測り、心心距離で東西長軸で約6.3m以上、南北短軸で4.5mを測る。遺物の出土は見られなかった。



第26図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)



第27図 3号据立柱建物実測図 (1/60)



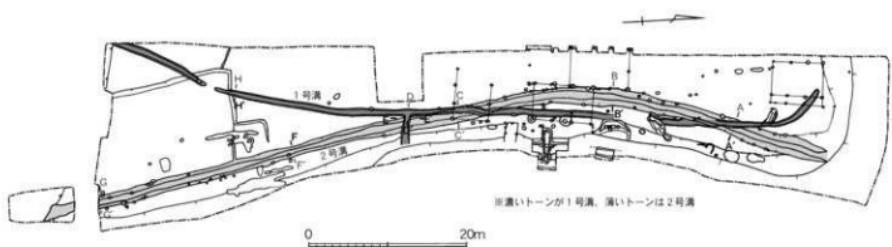
第28図 4号掘立柱建物実測図 (1/60)

2. 溝

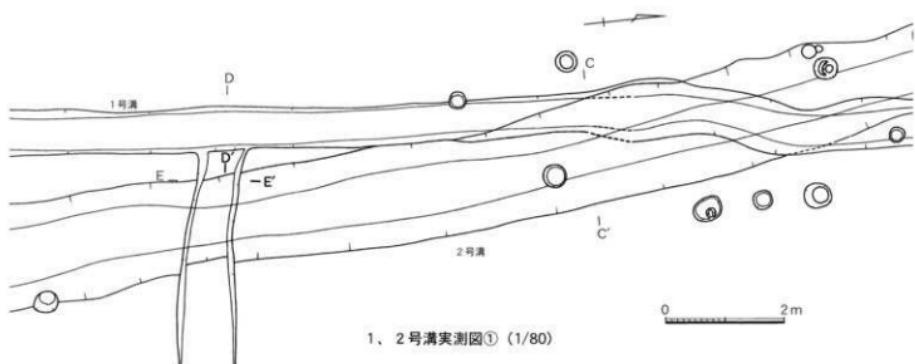
調査区内を縦断して南北に2条の溝が検出された。これらの溝は切りあっており、2号溝の後1号溝が作られたようである。

1号溝（第29図、図版15）

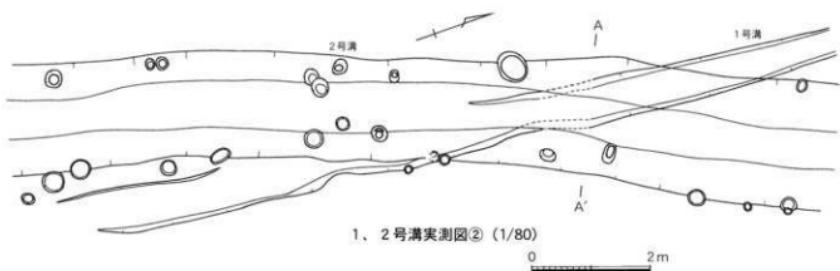
調査区を南北に縦断する溝で、2号溝、1号土坑、4号土坑を切っており、1号建物に切られている。調査区内での長さ約89m、検出面での幅は広いところで50cmを測り、検出面からの深さは15~25cmを測る。断面形状は浅いレンズ状を呈しており、中央部に向かって両側から深くなっている。埋土は黒褐色土が大部分を占め、H-H'間では暗黄褐色土の砂質土（2~4層）が互層状に堆積しており、水の流れが比較的速くあったものと推測される。また、中央部にはT字状溝が延びる箇所がある。このT字部分は南北の溝に直角に付けられており、南北方向の溝から一段高くなっている。D-D'間の土層では南北と東西方向での切り合い関係は確認出来なかったことから、T字部分は南北方向から流れてきた水をこの部分で東側に流す機能を有していたものと考えられる。D-D'間土



1、2号溝全体 (1/600)

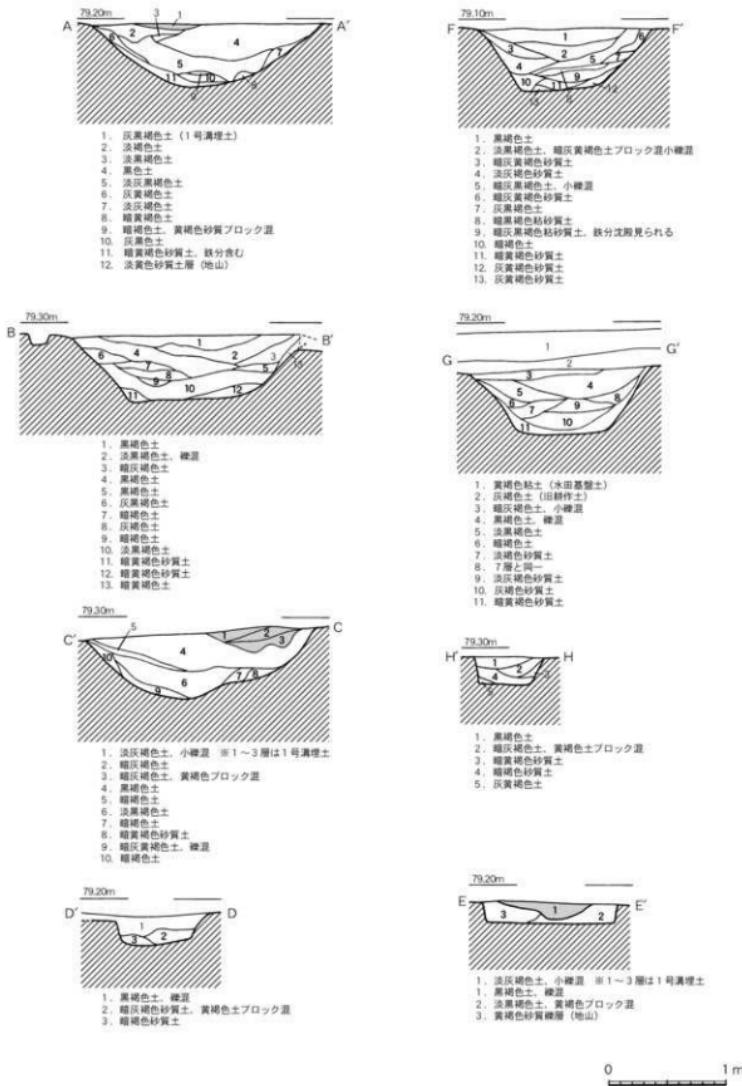


1、2号溝実測図① (1/80)

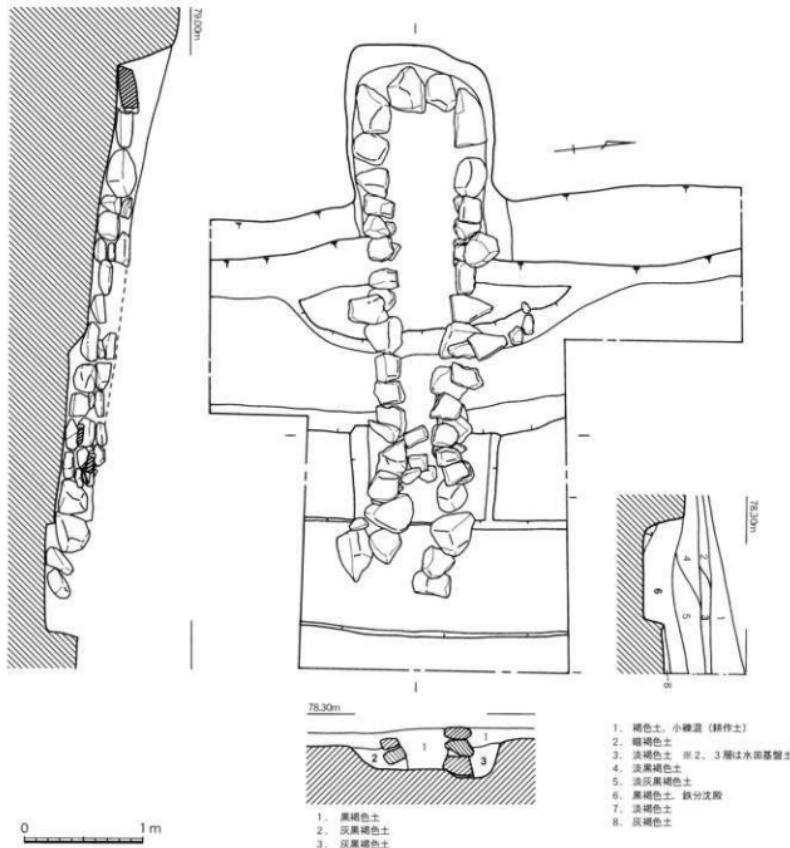


1、2号溝実測図② (1/80)

第29図 1、2号溝実測図 (1/80, 1/600)



第30図 1、2号溝土層断面実測図 (1/40)



第31図 1号用水路実測図 (1/40)

層の下層には砂質土（3層）が堆積していることから、あるいはこの部分において水に含まれる砂などを堆積させ、上面の比較的きれいな水を東側に流す目的などが想定されるが、明確な根拠を持たず、推測の域を出ない。

出土遺物（第34図、図版27）

1、3はT字状の部分から出土し、2は南北方向の埋土より出土している。1～3は土師器で底面に糸切り痕が残る。

2号溝（第29図、図版17）

調査区を南北に縦断する溝で、1号溝、2～4号建物に切られている。調査区内での長さ約100m、検出面での幅は広いところで2.3mを測り、検出面からの深さは約50cmを測る。調査区南の簡易道

路部分において溝の端を確認しており、このトレーンチ内での削平が著しいため、削られた溝の南端が確認出来ている。本来はここから南側へと延びていたものと考えられる。断面形は逆台形状を呈しており、南側に向かって若干下がっていることから、南側へと流れていたものと考えられる。いずれの土層においても埋土は黒褐色土、暗褐色土が大部分をしめ、互層状に堆積し、次第に埋まつたことを示しており、作り直しの痕跡などは確認出来なかった。また、F-F'間では明確に鉄分が沈殿している状況（9層）が確認されており、緩やかに水流があったことを示している。

出土遺物（第34図、図版27）

4は土師器壺か皿の破片である。5は轟B式土器の深鉢である。口縁部下部に3状の隆起帯を貼り付けている。

3. 用水路

1号用水路（第31図、図版19）

調査区中央よりやや北側の東端にて検出された遺構である。長方形の掘り方に2～3段の石を積み上げて用水路とし、東側では南北方向の溝につながっている。調査区内での長さ約5m、幅約1.25mを測り、深さは約30cm程度である。埋土は殆どが黒褐色土を呈していた。中央付近には最初に作ったと思われる南北方向の溝があり、この溝をつぶして用水路を作り直している。東側では南北方向への溝に段差を付けて水が流れ込むようになっており、溝内に用水路の石が数石崩落していた。土層を観察すると、1層～2、3層が現況基盤土、その下部に近世の盛土と考えられる4、5層が堆積しており、その下部に溝埋土6層が見られた。このうち用水路内には5層や4層が部分的に流入しており、この盛土の際に用水路が埋没した可能性が高いと判断した。遺物の出土が見られないことから、時期の決定根拠には乏しいものの、この4、5層は現況基盤土盛土直下であり、その流入状況などから、近世以降の可能性が高いのではないかと考えられる。

4. 土坑

土坑は全部で7基が確認されたが、その埋土は何れも黒褐色土であった。

1号土坑（第32図、図版20）

調査区北側にて検出された土坑で、1号溝に切られる。確認面での規模は東西幅約270cm、南北幅約90cmを測る不正形を呈する。遺物の出土は見られなかった。

2号土坑（第32図、図版20）

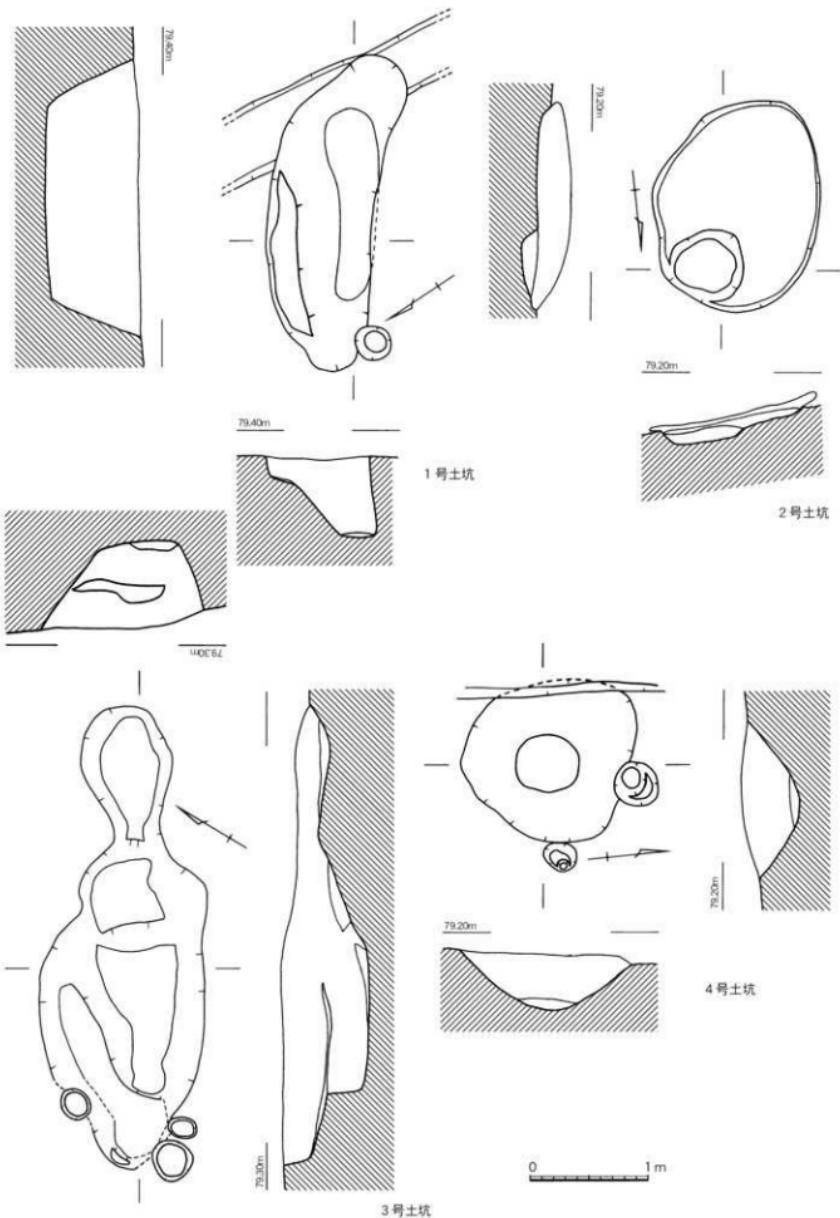
調査区北側にて検出された土坑で、確認面での規模は南北幅約180cm、東西幅約140cmを測る梢円形を呈する。遺物の出土は見られなかった。

3号土坑（第32図、図版21）

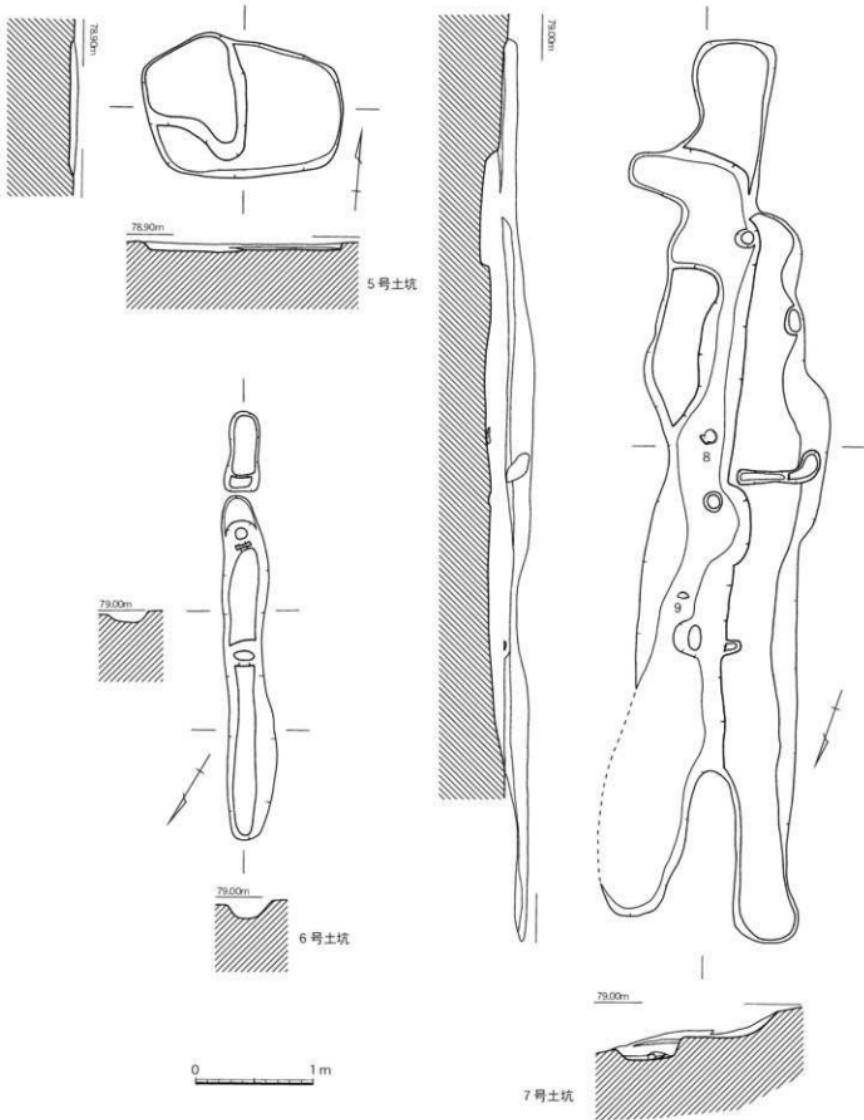
調査区北側にて検出された土坑で、1号溝と切り合いがあると考えられるが、ちょうどこの部分が削平を受けていたことから、前後関係が不明である。確認面での規模は南北幅約390cm、東西幅約140cmを測る不正形を呈する。遺物の出土は見られなかった。

4号土坑（第32図、図版21）

調査区北側にて検出された土坑で、1号溝に切られる。確認面での規模は南北幅約140cm、東西幅約140cmを測る不正円形を呈する。遺物の出土は見られなかった。



第32図 1、2、3、4号土坑実測図 (1/40)



第33図 5、6、7号土坑実測図 (1/40)

5号土坑（第33図、図版21）

調査区南側にて検出された土坑で、確認面での規模は南北幅約120cm、東西幅約170cmを測る不正形を呈する。

出土遺物（第34図、図版27）

6は縄文土器の口縁部である。時期は不明であるが、口唇部を内面に屈曲させ、円盤状の突起を貼り付けている。

6号土坑（第33図、図版22）

調査区南側にて検出された土坑で、2号溝と平行する軸をとる。確認面での規模は南北幅約360cm、東西幅約40cmを測る溝状を呈する。

出土遺物（第34図、図版27）

7は青磁碗の口縁部破片である。外面には鶴蓮弁文が施されている。

7号土坑（第33図、図版22）

調査区南側にて検出された土坑で、2号溝と平行する軸をとる。確認面での規模は南北幅約7.6m、幅約1.6mを測る不正形を呈している。やや溝状に南北に長い形をしている。

出土遺物（第34図、図版27）

8は土師器壺である。口縁部は外側に開き、底部には糸切り痕が残る。9は土師器壺である。底部には糸切り痕が残る。10は土師器壺である。底部には糸切り痕が残る。11は土師器小皿である。底部は明瞭に屈曲し、直立気味に立ち上がる。底部には糸切り痕が残る。12は土師器小皿である。口縁部は外に開き、底部には糸切り痕が残る。13は土師器甕である。14は青磁碗の破片である。内面にはヘラによる文様が施される。

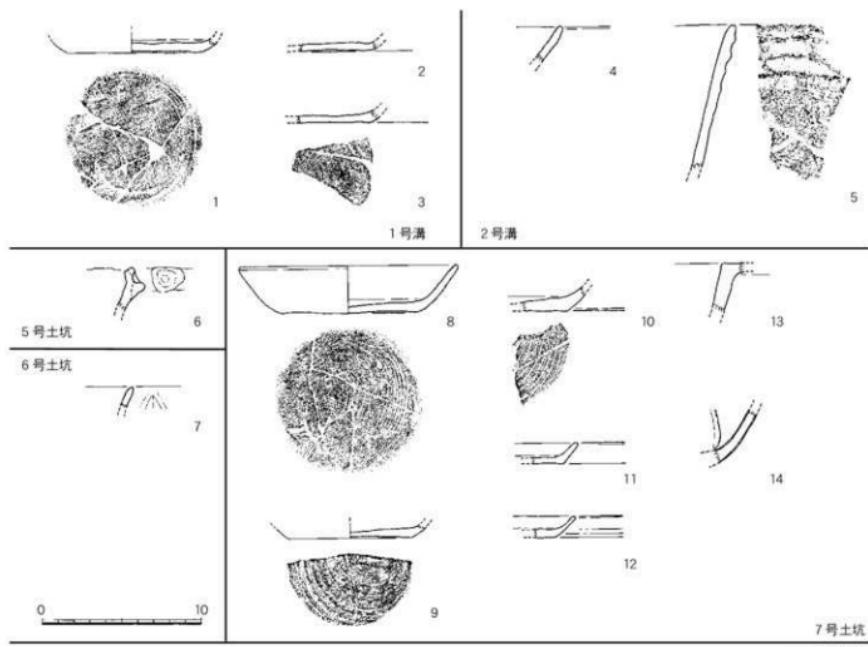
5. その他の遺物（第34図、図版27）

ここでは調査区内の基盤土中から出土した遺物を掲示する。15は土師器壺である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。底面には糸切り痕が残る。16は土師器小皿か。口縁部は開き気味に立ち上がり、底部は上げ底状を呈する。底面には糸切り痕が残る。17は土師器甕である。内外ともに炭化物を付着させて黒くしており、内面にはハケメが施される。18は中期阿高式土器の破片か。滑石を含み、凹線にて文様が描かれる。

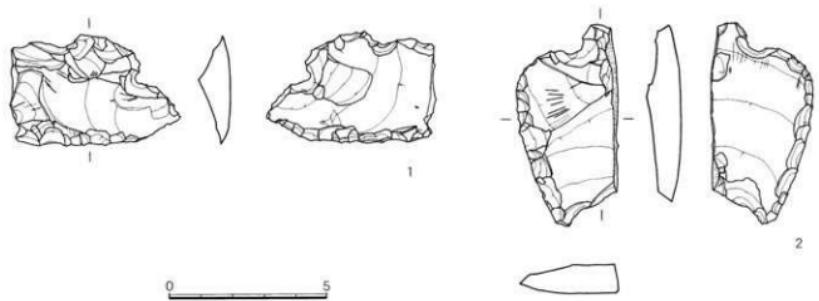
6. 石器（第35図、図版28）

各遺構より出土した石器を一括して説明する。

1は2号溝より出土した安山岩製の石匙である。横型の石匙と考えられ、つまみをノッチにより作り出し、刃部は両側から丁寧に作り出されている。2は5号土坑より出土した安山岩製の石匙である。縦型の石匙であると考えられ、つまみをノッチにより作り出す。右側辺には自然面が残り、左側面には両側から丁寧に刃部を作り出している。



第34図 C区出土土器実測図 (1/3)



第35図 C区出土石器実測図 (2/3)

IV まとめ

(1) 遺構の時期と変遷

各調査区内で確認された遺構は、主に縄文時代の包含層、掘立柱建物6棟、溝4条、土坑13基、用水路1基であった。以下、各遺構の所属すると考えられる時期について検討を加える。

1. 縄文時代

縄文時代に所属すると考えられる遺構は主に、B区において確認された遺物包含層、B区2号溝、2、3号土坑、C区5号土坑などである。以下時期について説明する。

遺物包含層からは多くの土器が出土しているが、主にその文様的特徴から7種類に分類することが出来た。(26~29頁)しかし、包含層のはば同一層位から出土しており、また、周辺部からの流れ込み時の堆積の可能性が高いことから、これらの種別が時期的変化を反映しているかどうか検討することが出来ない。そこで、各1~7類の土器の特徴について各研究を参考に検討してゆくこととする。

1~4類は轟B式土器に所属するものと考えられる。

轟式土器の研究はこれまでに様々な研究がなされている。その初源となる研究は松本・富樫氏^(注1)によるもので、轟式をA式~D式までに分け、アカホヤ火山灰層降灰前の早期にA式、前期にB式→曾畠式→C・D式といった大まかな変遷過程が層位的に証明されている。現在までのところ、いくつかの問題点を含むものの、この基本的変遷過程は編年上に定着している感が見られる。さて、この中で縄文時代前期の土器としては轟B式土器が位置づけられている。この轟B式土器は松本・富樫氏の分類によれば、「条痕の上に粘土帯を貼り付け、それを指頭でつまんで隆起線文（いわゆるミミズバレ文）をつくるもので、条痕の効果を強調するものである。」とされる。このように隆起線文（隆起帶文）を持つ土器の一群が轟B式土器であり、前期の前半に位置づけられる土器の一群として九州の縄文土器編年上に定着しているのであるが、このB式土器の変遷過程については様々な研究者により検討が行われている。^(注2~③~⑤)ここではその詳細を語ることはしないが、基本的な文様の変遷過程においては隆起帶断面が三角形から次第に蒲鉾型へと変化するという点、また、隆起帶の数は、口縁部に密につけるもの、口縁部と胴部に分けて貼るものがあるが、隆起帶断面が蒲鉾型になるにしたがって本数が減少するという点において共通している。

さて、当遺跡出土の1類は隆起帶断面が三角形状を呈し口縁下部に密に貼り付けるものが多いのに対し、2類は断面形が丸みを帯び、本数が4本以下と少ない。これらの特徴は上述の特徴と一致していることから1類⇒2類への変遷が想定され、この1類⇒2類の変化は隆起帶断面が明確に蒲鉾型を呈するものが見られることなどから、時間的幅は非常に短く、ほぼ同一の時間幅の中で包括しうると考えたい。また、4類は宮本氏^(注2~③)、高橋氏^(注2~②)によれば、九州中部、北部に多くみられる地域的特徴を示す弧状をなす隆起帶が貼り付けられる一群で、ほぼ1、2類に伴うものとして考えられている。さて、以上のような点から、1~4類は宮本氏のⅡ段階、高橋氏の4式などに位置づけられ、轟B式土器のうちやや後出する前期前半でも中頃の時期に収まると考えられる。

5類は豆粒状の粘土を貼り付けているものであるが、口縁下部に貼り付けるという点から轟式との関連の中で捉えうるものと考えられる。

6類は条痕のみで構成される土器でいずれも小型の鉢状を呈する。条痕のみで構成される一群は松本氏によれば轟A式土器とされるものであるが、6類は小型の鉢状で深鉢形をなさず、また条痕を幾何学状に配さない。条痕の大きさ・単位や方向は1～4類とほぼ同じであるなどの点から6類は、轟A式ではなく、B式の1～4類と共に伴する粗製の土器群であると考えられる。

7類は曾畠式土器である。破片が多くその文様構成の特徴を判断する材料に乏しいが、第21図35は口縁部内面に刺突列点文を施している点、殆どの文様構成が平行斜線文などで構成されている点などから、中村氏^(注3)の曾畠I式土器に位置づけられ、前期後半の前葉に位置づけられるのではないかと考えられる。

さて、以上の点からこの縄文時代包含層は少なくとも前期前半中頃～後半前葉の範疇に収まると判断される。したがって、この包含層上面を掘り込む遺構群はこれより後出する時期のものであると考えられる。2、3号土坑は轟B式、曾畠式土器の出土が見られ、包含層の遺物が埋没時に流入した可能性が考えられることから前期後半前葉以降と考えられる。C区5号土坑は口縁部文様帶に円盤状の隆帯を貼り付ける土器から、後期前葉の縁帶文土器に所属すると考えられ、後期前葉以降と考えられる。B区2号溝は出土遺物の大半が轟B式土器であるが、晚期黒川式土器が出土していることから、少なくとも晚期中頃以降と考えられる。

2. 中世

A区1号建物、B区1号建物、1号溝、C区1～4号建物、1、2号溝、6、7号土坑、その他土坑、柱穴が該当するものと考えられる。いずれの遺構の埋土もほぼ同一であり類似した時期の所産であることが伺える。また、これらの遺構に伴って出土した遺物の量は非常に少なく、しかも破片資料が多いことから、各遺構ごとの時期を押さえるのは困難であると判断される。そこで、各遺構から出土している遺物が包含される時期幅を推定し、各遺構の変遷は切り合い関係などから検討したいと思う。

このうち、B区1号建物周辺の柱穴より出土している土師皿（第15図21）が径8.6cmと小型化していること、C区7号土坑出土の土師皿（第34図11）やC区一括出土の土師皿（第34図16）が上げ底気味を呈すること、またC区7号土坑出土の土師器坏（第34図8）が径13.8cmとやや小形化していることなどはその特徴より行時氏^(注4)のⅡ期や前川氏^(注5)のⅡ-3、山本氏^(注6)のXVII期に該当するものと考えられる。また、B区1号溝出土の青磁碗（第15図1）は見込みに草花文を施しており、C区6号土坑では鷲蓮弁文の入った青磁碗（第34図6）が出土しており、これらの遺物は山本氏^(注7)のI～5類に該当するものと考えられ、前述の土師器の年代とほぼ同じ時期の13世紀前半期の範疇に収まるものと推測される。したがって、これらの中世期の遺構の多くは13世紀前半以降の所産であると判断される。

さて、これらの結果を元に各遺構の時期について検討を行いたい。まず、各溝跡であるが、なかでも、C区1、2号溝では切り合い関係が確認されていることから、2号溝⇒1号溝への変遷が読み取れる。またその軸方向がB区1号溝とC区の1、2号溝とではやや軸方向にズレが生じていることから、若干の時期の違いがある可能性も考えられる。次に建物群であるが、A区1号建物、B区1号建物は主軸をやや北東方向に向けるのに対し、C区1～4号建物はほぼ南北、東西に主軸が取られるという違いがある。少なくとも前者はB区1号溝と平行した軸方向をとり、ほぼ同時期の

所産の可能性が想定され、C区においては1～4号建物の軸の統一性という点から建物群は同時期のものであり、切り合い関係から1号溝以降の所産であると推測される。また土坑群であるが、C区6、7号溝はその軸方向が2号溝とほぼ平行していることから、同時期と推測されうる以外は、明確な時期の比定は困難である。しかし、各区にて確認された土坑や柱穴群は建物跡周辺部にのみ確認されており、建物のない範囲には広がっていないことは明らかであることから、少なくとも建物群とはほぼ同時期のものであると想定される。したがって、現時点では判明する中世期の遺構の変遷はC区2号溝、6、7号土坑⇒1号溝⇒1～4号建物、土坑、柱穴へと変遷がたどれ、このいすれかの時期にA、B区の建物と溝が該当すると判断される。ただ、いずれの遺構もその軸が大きくずれていないことなどから、その時期幅は非常に短かった可能性が考えられる。

(2) 遺構の性格について

前項の時期の検討から各時代毎の遺構の性格について検討することとする。

1. 繩文時代

本遺跡における縩文時代の生活の足跡は前期前半から始まる。この時期に遺跡周辺部から遺物が流れ込んだ前期前半から後半の包含層が確認されている。この時期のまとまった資料は少なく、やや上流の大肥条里下河内地区^(註8)ではほぼ同時期の集石炉などが確認されるほかは、表2にまとめているように手崎遺跡^(註23)において包含層より轟B式土器の出土が見られ、大波羅遺跡^(註24)において流れ込みの資料が確認される程度である。周辺部を見渡してみると、本遺跡より山を西側に越えた福岡県杷木町天園遺跡^(註9)、朝倉郡朝倉町金場遺跡^(註10)などから前期轟B式へ曾畠式の包含層や土坑などが確認されており、また、南東側に大山川をのぼった天瀬町芋作台遺跡、鳥ヶ塚遺跡、平草遺跡、湯山台遺跡^(註11)などでは轟式土器のまとまった資料が得られている。このことから、朝倉から日田郡にかけて前期の集落が数少ないながらも分布し、特に山間部を縫うようにして所在しており、キャンプサイト的な集落を転々と営んでいたのではないかと考えられる。また、筑後川沿線にこれらの遺跡が転々と所在していることは、杷木から大鶴に抜け、それから天ヶ瀬へと至るルートがこの時期には確立していたものと考えられ、本遺跡は福岡から日田へと抜けれるルート上に当たっていたものと考えられるのである。

次に、時期の下る後期以降と想定されるC区5号土坑、晚期黒川期以降のものと想定されるB区2号溝であるが、遺構数も少ないとから、これが当該期のどのような性格なものであるのかをここでは想定し得ない。しかし、表2にあるように日田市内の縩文後期以降と想定される遺跡の存在は圧倒的に多いことがわかる。本遺跡よりやや下った大肥祝原遺跡D区^(註12)においても後期から晩期の包含層や集石などが見つかっており、市内でも埋甕や土偶の存在が知られるなど、この時期に縩文集落が各所に営まれていることを示している。しかも、周辺部を見渡してみると、本遺跡より山を西側に越えた九州横断自動車道関係の調査^(註13)では杷木町クリナラ遺跡、楠田遺跡、小覚原遺跡、二十谷遺跡、畑田遺跡、天園遺跡、隈壁遺跡など多くの縩文時代晩期を中心とした集落遺跡が見つかっており、さらに下った朝倉町でも長田遺跡や金場遺跡など多数の集落遺跡が発見されているのである。また、南東側に大山川をのぼった天瀬町では芋作台遺跡、鳥ヶ塚遺跡、出口遺跡、平草遺跡、湯山台遺跡、本城野遺跡^(註14)などで後期から晩期の資料が多数得られている。

このように見てゆくと、集落の機能は土坑や溝だけでは想定しえないが、縄文時代後期以降に市内各所に生活の範囲を広げてゆくなかでも、本遺跡周辺のような矮小な河岸段丘上が生活地点として利用されていたことが想定されるのである。

2. 中世

当遺跡の中世集落の検討にはその変遷が確実に追えるC区の遺構の検討が最も有用である。

前項の時期検討から13世紀前半期には少なくとも溝跡がC区において作られる。この2号溝には水が流れていることは確実であることから、生活用水路としての機能を有していた可能性を考えられる。さらに、その後作られる1号溝は水流もあり、また東側へと水を流し込む機能を有していたことから、生活用水路としても機能が高く、かなり企画的な生活水路の設計意識がうかがえ、あるいは調査区東側に集落域が広がっていた可能性も想定される。その後、これらの溝が用途廃止され埋没したのち、建物群が形成され集落域が作られるようになる。しかし、この集落域は調査区内では北側の一部に集中するのみであることから、比較的小規模な集落域の形成と考えられる。このように当初、生活用水路を作りそれを次第に廃絶し、新たに集落域を形成する過程がうかがえるのであるが、このことはこの古屋敷遺跡周辺に比較的小規模な集落が形成され、次第にその位置を変えといったことを物語っている。したがって、同様にA、B区の遺構はこの集落位置が移動するなかで形成されたものと捉えたいと思う。

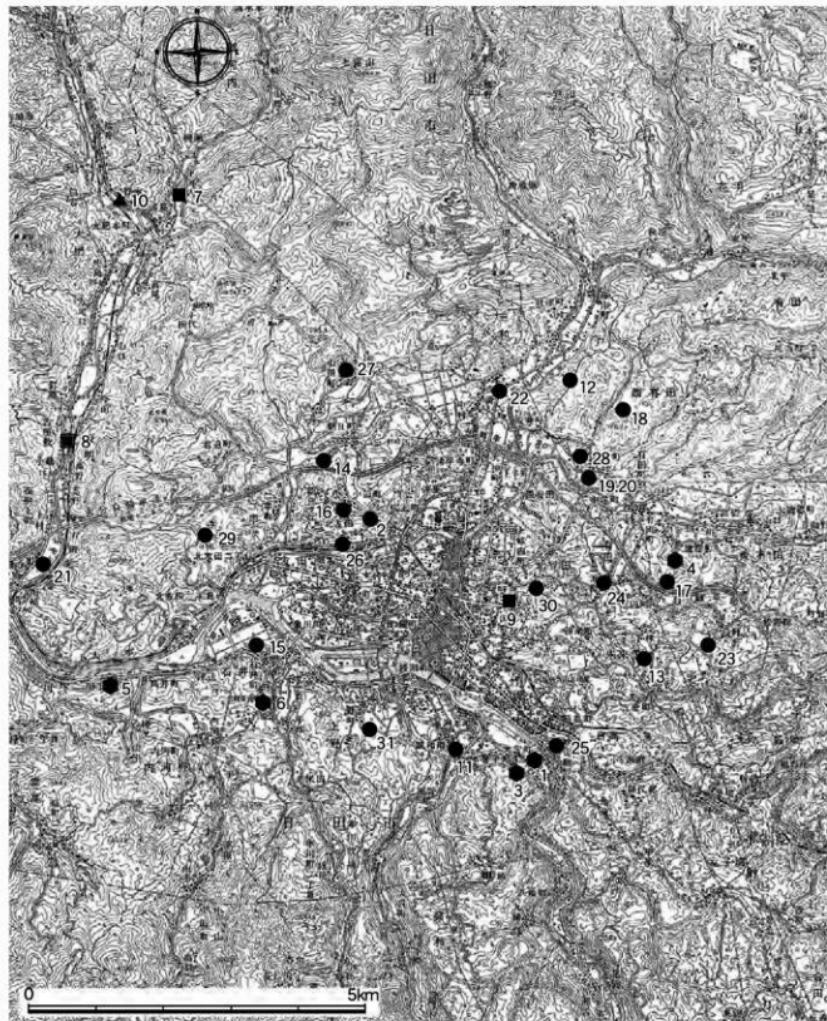
さて、この大肥一帯には2章でも述べているとおり、「大肥荘」と呼ばれる荘園の存在が明らかとなっている。^(註15)また、上流の大肥中村遺跡^(註16)では、中世期の建物群や鍛冶工房跡、水田跡などを見つかっており、下った高野遺跡^(註17)では15棟以上の建物群が確認されている。両遺跡とも大肥川によって形成される広範な河岸段丘上に位置する大きな集落跡であるのに対して、当遺跡の集落跡は矮小な河岸段丘上に小規模な集落が形成されていたという違いが見られる。

中世期の水田跡は大肥中村遺跡、祝原遺跡^(註18)などで確認されているものの、「大肥荘」の実態がどのようなものであったのかは明らかにすることは現時点では困難である。しかし、少なくとも大肥川流域に広がる低位河岸段丘上にその水田域が設けられていた可能性は高く、その經營母体となる集落はその水田域から除かれた範囲ということになる。当遺跡において確認された集落はその規模がかなり小さく、しかも矮小な河岸段丘上に位置していることから、水田開発に影響の少ない山の斜面などの矮小な場所を選定して当時の集落が営まれていた可能性が想定されるのである。現時点の資料ではこれらは想像の域をでないが、今後少なくとも当遺跡の集落は「大肥荘」の実態を明らかにしてゆく上で重要な成果であると言えよう。

表2 日田市内の縄文時代遺跡一覧表

遺跡名	時期	遺構	参考文献
1 大部遺跡	早期	集石	田中祐介 日田市高瀬遺跡群の調査2 大分県教育委員会 1998
2 吹上遺跡	早期・晚期	流れ込み	下村智「吹上II」日田市埋蔵文化財調査報告書第52集 2004
3 手崎遺跡	早期～晚期	包含層、堅穴住居跡	田中祐介ほか 日田市高瀬遺跡群の調査2
4 石ヶ迫遺跡	早期・晚期	落とし穴・集石	行野桂子 日田市埋蔵文化財調査報告書第49集 2004
5 川下遺跡	早期・後期	表採	穴井通道「筑後川上流の縄文土器」九州考古学11・12 1961
6 長者原遺跡	早期・後期	集石・包含層	若杉竜太 平成12年度年報(2000) 2001, 日田市史
7 大肥糸里下河内地区	前期	集石・土坑	行時志郎 平成12年度年報(2000) 2001
8 古屋敷遺跡	前期・後期～晚期	包含層	本報告
9 大波羅遺跡	前期・後期～晚期	流れ込み	渡辺隆行編 日田市埋蔵文化財調査報告書第29集 2001ほか
10 大肥吉竹遺跡	中期	土坑	渡辺隆行 日田市埋蔵文化財調査報告書第48集 2004
11 高瀬糸里深野田地区	後期	落とし穴	行時志郎 日田市埋蔵文化財調査報告書第36集 2002
12 葛原遺跡	後期	堅穴住居跡	水田裕久 平成8年度年報(1996) 1998ほか
13 求求里平島遺跡C区	後期	堅穴住居跡	土居和幸編 日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 2002
14 尾部田遺跡	後期	堅穴住居跡	行時志郎 日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 2001
15 隅山遺跡	後期	包藏地	日田市史
16 朝日ヶ丘遺跡	後期	落とし穴	五十川康也 日田市埋蔵文化財調査報告書第18集 2000
17 有田塚ヶ原遺跡	後期	落とし穴	行時志郎 平成7年度年報(1995) 1997
18 西有田赤ハグ遺跡	後期～晚期	包含層	行時志郎編 日田市埋蔵文化財調査報告書第7集 1992
19 川原田遺跡	後期～晚期	流れ込み	吉田博嗣 日田市埋蔵文化財調査報告書第32集 2001
20 内ノ下遺跡	後期～晚期	流れ込み	吉田博嗣 日田市埋蔵文化財調査報告書第33集 2002
21 大肥祝原遺跡D区	後期～晚期	集石・包含層	若杉竜太 平成11年度年報(1999) 2001
22 三和教遺跡C区	後期～晚期	流路	吉田博嗣 大分県文化財調査報告98編 大分県教育委員会 1997
23 松野原遺跡	後期～晚期	包藏地	日田市史、大分県遺跡地図1993
24 森ノ元遺跡	晚期	埋甕	行時志郎編 日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 1998
25 牧原遺跡	晚期	流れ込み	松下千子 日田市埋蔵文化財調査報告書第12集 1997
26 今泉遺跡	晚期	流れ込み	渡辺隆行 日田市埋蔵文化財調査報告書第37集 2002
27 山ノ口遺跡	晚期	包含層	行時志郎 日田市埋蔵文化財調査報告書第26集 2000
28 大行事遺跡	晚期	柱穴	渡辺隆行 日田市埋蔵文化財調査報告書第33集 2002
29 六原遺跡	晚期	包含層	土居和幸 日田市埋蔵文化財調査報告書第43集 2003
30 赤追遺跡	晚期	包含層	行時志郎 平成6年度年報(1994) 1996
31 上野第一遺跡	晚期	土坑	田中祐介 日田市高瀬遺跡群の調査3 大分県教育委員会 2001
32 口が原遺跡	—	流れ込み	吉田博嗣 日田市埋蔵文化財調査報告書第17集 1998
33 尾瀬遺跡	—	落とし穴	行時志郎 日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 2001
34 小削遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651009)
35 水上遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651017)
36 前ヶ尾遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651018)
37 草場野遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651021)
38 奥谷遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651023)
39 柴尾遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651055)
40 大見取遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651082)
41 鹿廻遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651084)
42 花屋遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651127)
43 陣ヶ原遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651131)
44 松金遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651169)
45 ハル遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651185)
46 日高遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651202)
47 高尾原遺跡	—	包藏地	大分県遺跡地図1993 (遺跡番号651203)

※ 参考文献は主なものを探しておらず、編集者、報告書巻数、年度を表示している。
 時期の不明なものは開いていないが、縄文土器が確認できたものである。
 大分県遺跡地図より調べた遺跡に開いては遺跡番号を掲示している。



第36図 日田市内の縄文時代遺跡分布図 (1/70,000)

※ 番号は表2の番号に対応しており、時期のわからない32番以下は図示していない。
 ●は早期、■は前期、▲は中期、●は後期～晩期を示している。

《参考文献》

- 註 1) 松本雅明・富澤卯三郎 「轟式土器の編年」『考古学雑誌 第47巻 第3号』1961
- 註 2-①) 宮本一夫 「轟式土器様式」『讃文土器大観1』小学館 1989
- ②) 高橋信武 「轟式土器再考」『考古学雑誌 第75巻 第1号』1988
- ③) 中間研志 「6まとめ (2) 轟B式・曾畠式土器」
『天國遺跡の調査』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—42— 福岡県教育委員会 1996
- 註 3) 中村惠 「曾畠式土器」『綱文化の研究3』雄山閣 1982
- 木村幾多郎 「曾畠式土器様式」『讃文土器大観1』小学館 1989
- 註 4) 行時志郎 「Ⅲ まとめ 1. 高瀬条里永平寺地区の遺構の時期について」『高瀬条里永平寺地区』
日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 日田市教育委員会 2001
- 註 5) 前川威洋 「Ⅲ 土師器の分類および編年とその共伴土器について」
『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集下 福岡県教育委員会 1978
- 註 6) 山本信夫 「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」
『乙益重隆先生古希記念 九州上代文化論集』1990
- 註 7) 山本信夫 「Ⅲ 土器・陶磁器11 (2) 中世前期の貿易陶磁器」
『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1995
- 註 8) 行時志郎 「大肥条里下河内地区」『平成12年度(2000年)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001
- 註 9) 中間研志 「天國遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—42— 福岡県教育委員会 1996
- 註 10) 中間研志 「金場遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—54— 福岡県教育委員会 1999
- 註 11) 『天瀬町誌』天瀬町誌編纂委員会 1986
- 註 12) 若杉竜太 「大肥条里祝原地区」『平成11年度(1999年)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001
- 註 13) 中間研志 「クリナラ遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—43— 福岡県教育委員会 1997
- 伊崎俊秋 「楠田遺跡・小覚原遺跡・二十谷遺跡」
『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—49—』福岡県教育委員会 1998
- 伊崎俊秋 「畑田遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—56— 福岡県教育委員会 1996
- 伊崎俊秋 「笠隈遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—44— 福岡県教育委員会 1997
- 井上裕弘 「長田遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—30— 福岡県教育委員会 1994
- 註 14) 註 11と同じ
- 註 15) 『日田市史』 日田市 1990
- 註 16) 行時志郎 「大肥中村遺跡・発掘調査概報」日田市教育委員会 2003年
- 註 17) 若杉竜太 「高野遺跡」『平成15年度(2003年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004
- 註 18) 行時桂子 「祝原遺跡」『平成15年度(2003年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004



A区全景（南から）



A区南側完掘状況



1号掘立柱建物（東から）

写真図版 2



古屋敷遺跡周辺全景（真上から）



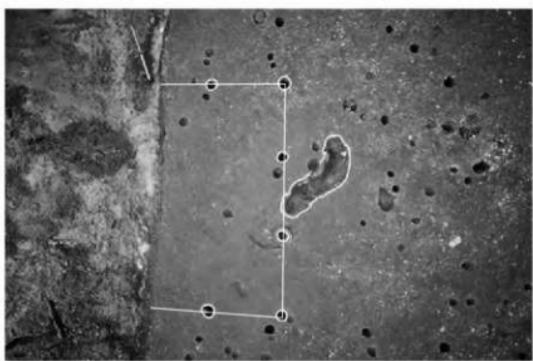
B区全景（真上から）



B区北側完掘状況（南から）



B区南側完掘状況（北から）



1号掘立柱建物（真上から）

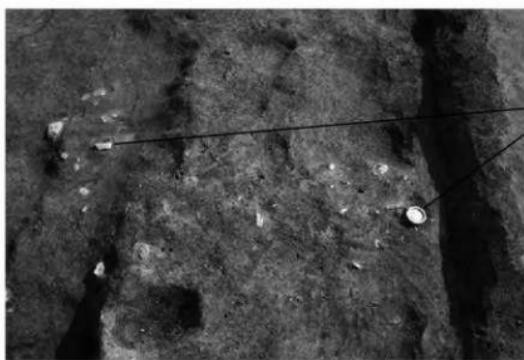
写真図版 4



1号溝完掘（北から）



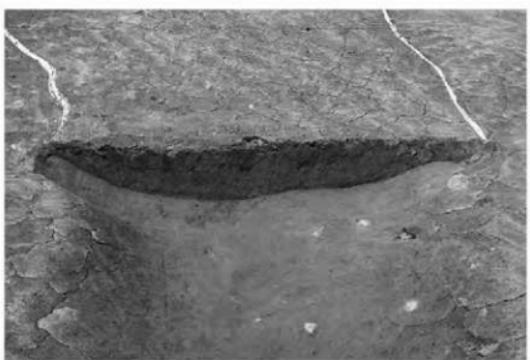
1号溝土層



※第15図 1の青磁碗
1号溝遺物出土状況



2号溝完掘（北から）

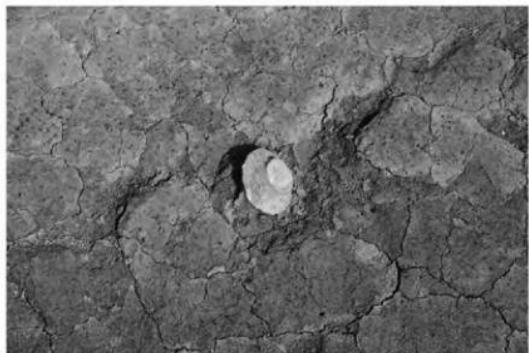


2号溝土層

写真図版 6



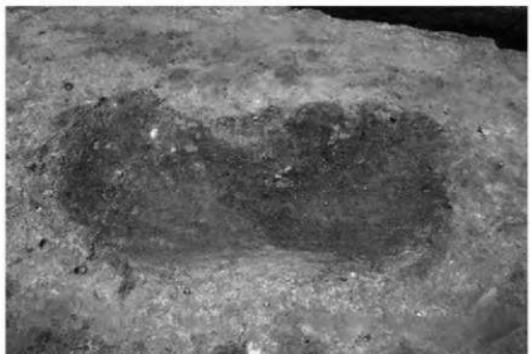
※第22図7
2号溝遺物出土状況①



※第15図14
2号溝遺物出土状況②



1号土坑（北から）



2号土坑（南から）



3号土坑（南から）



4号土坑（南から）

写真図版 8



5号土坑（東から）



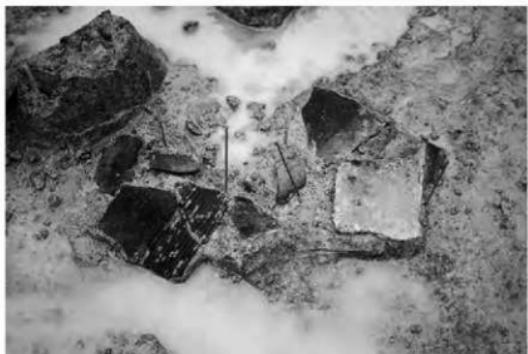
6号土坑（東から）



B-5 グリット完掘



写真図版 10



※第19図 1
B-5 グリット
遺物出土状況③



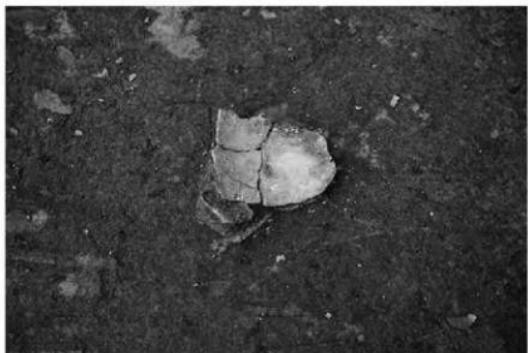
※第22図 1
B-5 グリット
遺物出土状況④



B-5 グリット
遺物出土状況⑤



写真図版 12



※第21図32

E-2、3グリット
遺物出土状況②



※第21図31

E-2、3グリット
遺物出土状況③



E-2、3グリット
遺物出土状況④

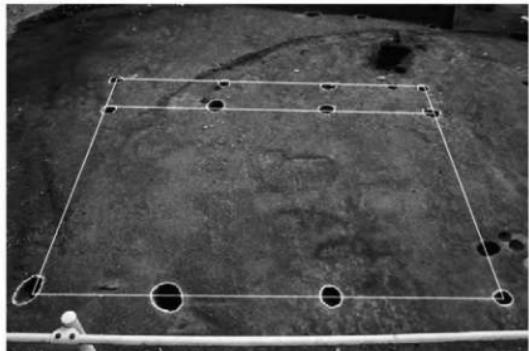


C区全景（北から）



C区全景（真上から）

写真図版 14



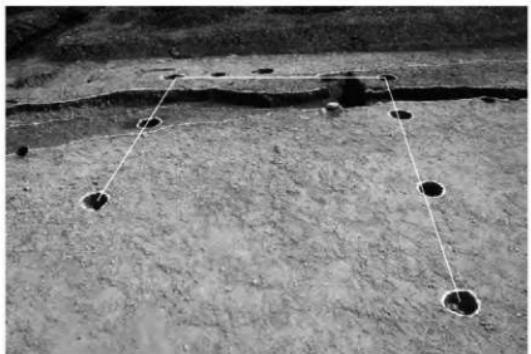
1号掘立柱建物（西から）



2号掘立柱建物（南から）



3号掘立柱建物（東から）



4号掘立柱建物（西から）



1号溝南側完掘（南から）



1号溝T字状部分完掘（東から）

写真図版 16



※手前側に段差がつく
1号溝T字状部分完掘（西から）



1、2号溝交差部分完掘（南から）



1、2号溝北側交差部分（北から）



2号溝南側道路部分トレンチ

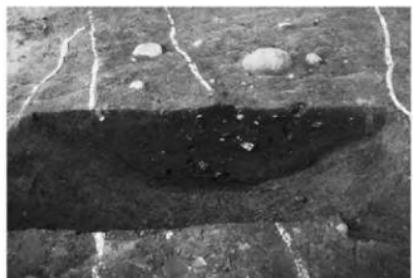


2号溝南側完掘（南から）



2号溝北側完掘（北から）

写真図版 18



① 1号溝A-A' 土層



② 2号溝B-B' 土層



③ 2号溝C-C' 土層



④ 1号溝D-D' 土層



⑤ 1号溝E-E' 土層



⑥ 2号溝F-F' 土層



⑦ 2号溝G-G' 土層



⑧ 1号溝H-H' 土層



写真図版 20



1号用水路拡張部土層



1号土坑（西から）



2号土坑（西から）



写真図版 22



6号土坑（北から）



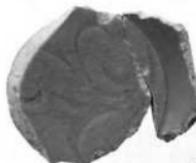
7号土坑（北から）



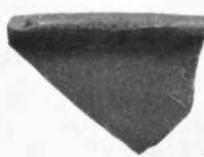
※第34図 8
7号土坑遺物出土状況



6-1



15-1



15-2



15-3



15-4



15-5



15-6



15-7



15-8



15-9



15-10



15-11



15-12



15-13



15-14



15-15



15-16



15-17

※写真図版に付した数字番号は挿図番号に対応する。

写真図版 24



15-18



15-19



15-20



15-21



15-22



19-1

| ※同一個体



19-2



19-3



19-1



19-4



19-5



19-6



19-7



19-8



19-9



20-10



20-11



20-12

*写真図版に付した数字番号は挿図番号に対応する。

写真図版 25



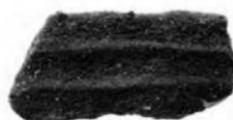
20-13



20-14



20-15



20-16



20-17



20-18



20-19



20-20



20-21



20-22



20-23



20-24



20-25



20-26



20-27



20-28



20-29



20-30

※写真図版に付した数字番号は挿図番号に対応する。

写真図版 26



21-31



21-32



21-33



21-34



21-35 (表)



21-35 (裏)



21-36



21-37



21-38



21-39



21-40



21-41



21-42



22-1



22-2



22-3

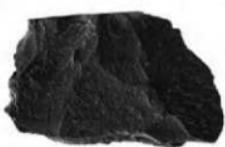


22-4



22-5

*写真図版に付した数字番号は挿図番号に対応する。



22-6



22-7



22-8



22-9



34-1



34-2



34-3



34-4



34-5



34-6



34-7



34-8



34-9



34-10



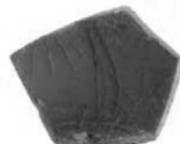
34-11



34-12



34-13



34-14

※写真図版に付した数字番号は挿図番号に対応する。

写真図版 28



34-15



34-16



34-17



34-18



35-1



35-2

※写真図版に付した数字番号は挿図番号に対応する。



発掘調査に参加された方々

報告書抄録

ふりがな	ふるやしきいせき
書名	古屋敷遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	渡邊隆行
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2004年12月17日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふるやしきいせき 古屋敷遺跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおいたし 大字夜明 よみ 字古屋敷	44204-6	651005	33° 21' 34"	130° 52' 52"	20030519~ 20031019	7,100	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項
古屋敷遺跡	集落	縄文 中世	溝 土坑 用水路 掘立柱建物 縄文時代包含層	4条 12基 1基 6棟 -	縄文土器 石器、土師器、青磁	A、B、C区	

古屋敷遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第56集

2004年12月17日

発 行 日田市教育委員会

大分県日田市田島2-6-1

印 刷 尾花印刷有限会社

大分県日田市田島本町8-8